

有価証券報告書

事業年度 自 2018年4月1日
(第73期) 至 2019年3月31日

大末建設株式会社

E 0 0 0 9 3

第73期（自2018年4月1日 至2019年3月31日）

有価証券報告書

- 本書は金融商品取引法第24条第1項に基づく有価証券報告書を、同法第27条の30の2に規定する開示用電子情報処理組織(EDINET)を使用し、提出したデータに目次及び頁を付して出力・印刷したものであります。
- 本書には、上記の方法により提出した有価証券報告書の添付書類は含まれておりませんが、監査報告書は末尾に綴じ込んでおります。

大末建設株式会社

目 次

	頁
【表紙】	1
第一部 【企業情報】	2
第1 【企業の概況】	2
1 【主要な経営指標等の推移】	2
2 【沿革】	4
3 【事業の内容】	5
4 【関係会社の状況】	5
5 【従業員の状況】	6
第2 【事業の状況】	7
1 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】	7
2 【事業等のリスク】	7
3 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】	8
4 【経営上の重要な契約等】	13
5 【研究開発活動】	13
第3 【設備の状況】	15
1 【設備投資等の概要】	15
2 【主要な設備の状況】	15
3 【設備の新設及び除却等の計画】	15
第4 【提出会社の状況】	16
1 【株式等の状況】	16
(1) 【株式の総数等】	16
① 【株式の総数】	16
② 【発行済株式】	16
(2) 【新株予約権等の状況】	16
① 【ストックオプション制度の内容】	16
② 【ライツプランの内容】	16
③ 【その他の新株予約権等の状況】	16
(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】	16
(4) 【発行済株式総数、資本金等の推移】	16
(5) 【所有者別状況】	17
(6) 【大株主の状況】	18
(7) 【議決権の状況】	19
① 【発行済株式】	19
② 【自己株式等】	19
2 【自己株式の取得等の状況】	19
(1) 【株主総会決議による取得の状況】	19
(2) 【取締役会決議による取得の状況】	19
(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】	19
(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】	20

	頁
3 【配当政策】	20
4 【コーポレート・ガバナンスの状況等】	21
(1) 【コーポレート・ガバナンスの概要】	21
(2) 【役員 の 状況】	27
(3) 【監査 の 状況】	32
(4) 【役員 の 報酬等】	34
(5) 【株式 の 保有状況】	36
第5 【経理の状況】	38
1 【連結財務諸表等】	39
(1) 【連結財務諸表】	39
① 【連結貸借対照表】	39
② 【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】	41
【連結損益計算書】	41
【連結包括利益計算書】	42
③ 【連結株主資本等変動計算書】	43
④ 【連結キャッシュ・フロー計算書】	45
⑤ 【連結附属明細表】	65
(2) 【その他】	66
2 【財務諸表等】	67
(1) 【財務諸表】	67
① 【貸借対照表】	67
② 【損益計算書】	69
③ 【株主資本等変動計算書】	72
④ 【附属明細表】	78
(2) 【主な資産及び負債の内容】	79
(3) 【その他】	79
第6 【提出会社の株式事務の概要】	80
第7 【提出会社の参考情報】	81
1 【提出会社の親会社等の情報】	81
2 【その他の参考情報】	81
第二部 【提出会社の保証会社等の情報】	82

【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	近畿財務局長
【提出日】	2019年6月25日
【事業年度】	第73期（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）
【会社名】	大末建設株式会社
【英訳名】	DAISUE CONSTRUCTION CO., LTD.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 日 高 光 彰
【本店の所在の場所】	大阪市中央区久太郎町二丁目5番28号
【電話番号】	(06) 6121-7143
【事務連絡者氏名】	執行役員総務部長 三 宅 嘉 徳
【最寄りの連絡場所】	大阪市中央区久太郎町二丁目5番28号
【電話番号】	(06) 6121-7143
【事務連絡者氏名】	執行役員総務部長 三 宅 嘉 徳
【縦覧に供する場所】	大末建設株式会社 東京本店 (東京都江東区新砂一丁目7番27号) 大末建設株式会社 名古屋支店 (名古屋市北区域見通三丁目5番地) 株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

(注) 第73期より日付の表示方法を和暦表示から西暦表示に変更しております。

第一部【企業情報】

第1【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次	第69期	第70期	第71期	第72期	第73期
決算年月	2015年3月	2016年3月	2017年3月	2018年3月	2019年3月
売上高 (百万円)	55,726	59,880	64,539	52,872	64,864
経常利益 (百万円)	1,882	3,584	4,168	2,629	3,882
親会社株主に帰属する当期純利益 (百万円)	1,633	2,270	3,547	1,848	2,815
包括利益 (百万円)	2,027	1,933	3,825	2,078	2,780
純資産額 (百万円)	6,390	8,268	11,882	13,853	16,421
総資産額 (百万円)	32,855	34,707	39,815	38,099	43,622
1株当たり純資産額 (円)	611.29	791.20	1,137.34	1,326.35	1,572.61
1株当たり当期純利益 (円)	156.24	217.26	339.47	176.96	269.58
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益 (円)	—	—	—	—	—
自己資本比率 (%)	19.4	23.8	29.8	36.4	37.6
自己資本利益率 (%)	30.4	31.0	35.2	14.4	18.6
株価収益率 (倍)	5.25	3.66	2.93	5.93	3.41
営業活動による キャッシュ・フロー (百万円)	1,082	1,705	1,862	9,010	5,968
投資活動による キャッシュ・フロー (百万円)	△20	120	△132	△554	463
財務活動による キャッシュ・フロー (百万円)	△5,301	△1,595	△1,094	△3,782	△790
現金及び現金同等物 の期末残高 (百万円)	2,343	2,574	3,209	7,883	13,524
従業員数 (人)	565	586	598	592	572

(注) 1. 売上高には、消費税等は含まれておりません。

2. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

3. 当社は、2014年8月1日付で10株につき1株の割合で株式併合を行っております。第69期の期首に当該株式併合が行われたと仮定して、1株当たり純資産額及び1株当たり当期純利益を算定しております。

(2) 提出会社の経営指標等

回次		第69期	第70期	第71期	第72期	第73期
決算年月		2015年3月	2016年3月	2017年3月	2018年3月	2019年3月
売上高	(百万円)	53,627	57,302	62,852	50,614	62,680
経常利益	(百万円)	1,686	3,425	4,103	2,557	3,842
当期純利益	(百万円)	1,496	2,172	3,492	1,776	2,751
資本金	(百万円)	4,324	4,324	4,324	4,324	4,324
発行済株式総数	(千株)	10,614	10,614	10,614	10,614	10,614
純資産額	(百万円)	5,860	8,009	11,417	13,281	15,730
総資産額	(百万円)	31,995	33,801	38,808	36,962	42,219
1株当たり純資産額	(円)	560.60	766.45	1,092.82	1,271.62	1,506.38
1株当たり配当額	(円)	5.00	10.00	20.00	20.00	20.00
(うち、1株当たり 中間配当額)	(円)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
1株当たり当期純利益	(円)	143.15	207.82	334.28	170.05	263.48
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益	(円)	-	-	-	-	-
自己資本比率	(%)	18.3	23.7	29.4	35.9	37.3
自己資本利益率	(%)	29.5	31.3	36.0	14.4	19.0
株価収益率	(倍)	5.73	3.83	2.98	6.17	3.48
配当性向	(%)	3.49	4.81	5.98	11.76	7.59
従業員数	(人)	474	496	509	512	501
株主総利回り	(%)	71.1	69.8	88.9	95.3	85.6
(比較指標：配当込み TOPIX)	(%)	(130.7)	(116.6)	(133.7)	(154.9)	(147.1)
最高株価	(円)	123 1,125	1,077	1,068	1,199	1,453
最低株価	(円)	91 796	669	675	890	874

(注) 1. 売上高には、消費税等は含まれておりません。

2. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

3. 提出会社の第71期の1株当たり配当額20円は、創業80周年記念配当額10円を含んでおります。

4. 2014年8月1日付で、10株につき1株の割合で株式併合を行っており、第69期の期首に当該株式併合が行われたと仮定して、1株当たり純資産額及び1株当たり当期純利益を算定しております。また、第69期の最高・最低株価の上段は株式併合前の株価を、下段は株式併合後の株価をそれぞれ表しております。

5. 最高・最低株価は、東京証券取引所市場第一部におけるものであります。

2 【沿革】

1937年3月山本末男が、大阪府南河内郡丹南村（現大阪府松原市）において個人経営の山本工務店を創業し、土木建築請負業を始めたのが当社の起源であります。その後事業を拡大発展させ、1947年3月資本金19万5千円をもって株式会社大末組を設立し、本店を大阪府松原市に置きました。

その後の主な変遷は次のとおりであります。

- 1955年7月 建設業法により建設大臣登録（チ）第4432号を完了
- 1959年4月 東京出張所を東京支店に昇格
- 1961年10月 大阪証券取引所市場第2部に上場
- 1962年2月 定款の一部を変更し事業目的を追加（不動産売買業）
- 1963年4月 本店を大阪市南区（現大阪市中央区）に移転、名古屋営業所を名古屋支店に昇格
- 1963年7月 東京証券取引所市場第2部に上場
- 1966年9月 宅地建物取引業法により建設大臣免許（1）第139号を取得（以後3年ごとに免許更新）
- 1967年5月 東京・大阪証券取引所市場第1部に上場
- 1970年1月 九州営業所を九州支店に昇格
- 1970年3月 社名を「大末建設株式会社」に改称
- 1970年9月 和歌山県において温泉付別荘地を開発するため、南部梅ヶ丘温泉(株)を設立
- 1972年1月 仙台営業所を仙台支店に昇格
- 1972年6月 南部梅ヶ丘温泉(株)を、大末サービス(株)に社名変更
- 1973年12月 九州支店を福岡支店に改称
- 1974年1月 建設業法改正により、建設大臣許可（特-48）第2700号の許可を受ける（以後3年ごとに許可更新）、高松営業所を四国支店に改称昇格
- 1983年3月 定款の一部を変更し事業目的を追加（土木建築工事の設計、監理並びにコンサルティング業務）
- 1986年1月 大阪本店を大阪総本店（建築本店、土木本店等）に、東京支店を東京本店に改組・改称
- 1990年4月 大阪総本店（建築本店、土木本店等）を建築本店並びに土木本店に改組・改称
- 1991年9月 本社、建築本店並びに土木本店を大阪市福島区に移転、福岡支店を九州支店に、仙台支店を東北支店にそれぞれ改称
- 1994年6月 建築本店、土木本店を大阪総本店に統合
定款の一部を変更し事業目的を追加（地域開発、都市開発に関する企画、調査、設計並びにコンサルティング業務等）
- 1995年1月 建設業法改正により、建設大臣許可（特-6）第2700号の許可を受ける（以後5年ごとに許可更新）
- 1996年9月 宅地建物取引業法改正により建設大臣免許（11）第139号を取得（以後5年ごとに免許更新）
- 1998年6月 大阪総本店（建築本店、土木本店等）を大阪本店に改組・改称
- 1999年5月 本社、大阪本店を大阪市中央区南船場に移転
- 2005年9月 大末サービス(株)がテクノワークス(株)の全株式を取得
- 2008年2月 大末サービス(株)からテクノワークス(株)の全株式を取得
- 2009年9月 本社、大阪本店を大阪市中央区久太郎町（現所在地）に移転
- 2010年3月 東北支店を閉鎖
- 2012年2月 宮城県に東北支店を開設
- 2014年4月 四国支店を中四国支店に改称
- 2015年1月 建設業法により国土交通大臣許可（特-26）第2700号の許可を受ける
- 2016年9月 宅地建物取引業法により国土交通大臣（15）第139号の免許を取得
- 2017年4月 安積エンジニアリング(株)の全株式を取得
- 2017年7月 大末サービス(株)、テクノワークス(株)、安積エンジニアリング(株)がテクノワークス(株)を存続会社として合併し大末テクノサービス(株)（現連結子会社）に社名変更
訪問看護事業を行うため、やすらぎ(株)（現連結子会社）を設立

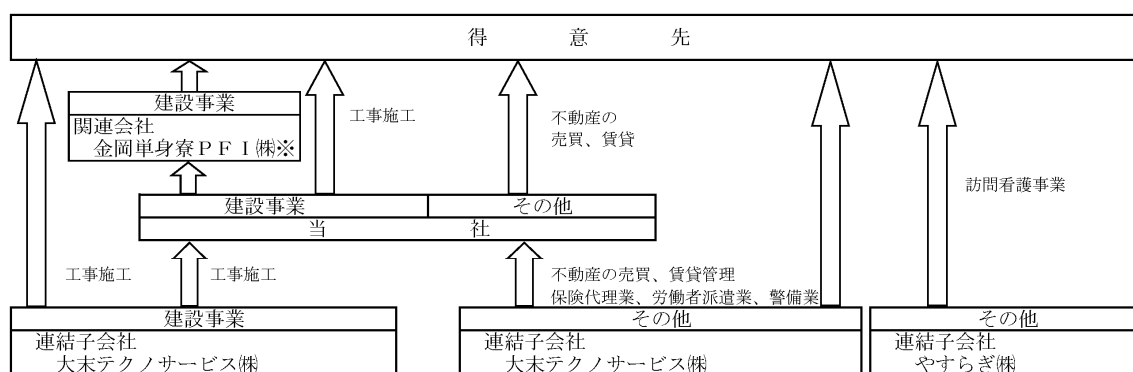
3 【事業の内容】

当社グループは、当社、子会社2社及び関連会社1社で構成され、建設事業を主な事業としております。当社グループの事業に係る位置付け及びセグメントとの関連は、次のとおりであります。

なお、当社グループは、建設事業並びにこれらの付帯業務の単一の報告セグメントであるため、事業区分別に記載しております。

建設事業 当社及び連結子会社である大末テクノサービス株式会社は、建設事業を営んでおります。また、関連会社である金岡単身寮PFI株式会社は、建設事業を営んでおります。

その他 当社及び連結子会社である大末テクノサービス株式会社は、不動産事業を営んでおります。また、大末テクノサービス株式会社は、保険の代理業、労働者派遣業、警備業を営んでおります。連結子会社であるやすらぎ株式会社は訪問看護事業を営んでおります。



(注) ※は持分法非適用会社であります。

4 【関係会社の状況】

(連結子会社)

名称	住所	資本金 (百万円)	主要な事業 の内容	議決権 の所有 割合 (%)	関係内容
大末テクノサービス(株)	大阪市中央区	50	建設事業 その他 (労働者派遣業、警備業、不動産管理業、保険代理業)	100.0	当社からの土木建築工事の請負業務及び当社への労働者派遣業務、警備業務、保険代理業務、不動産の管理業務等
やすらぎ(株)	東京都江東区	50	その他 (訪問看護事業)	100.0	—

(その他の関係会社)

名称	住所	資本金 (百万円)	主要な事業 の内容	議決権 の所有 割合 (%)	関係内容
ミサワホーム(株) (注) 2	東京都新宿区	11,892	工業化住宅の製造・施工・販売 宅地の造成・販売 増改築・リフォーム工事を中心とする事業	被所有 19.86	資本業務提携契約 当社に対する建築工事の発注 役員の兼任等あり

(注) 1. 主要な事業の内容欄には、セグメントの名称を記載しております。
2. 有価証券報告書を提出しております。

5 【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

2019年3月31日現在

区分	従業員数（人）
建設事業	462
その他	50
全社（共通）	60
合計	572

- (注) 1. 従業員数は就業人員数（当社グループからグループ外への出向者を除き、グループ外から当社グループへの出向者を含みます。）であります。
2. 全社（共通）として記載されている従業員数は、本社の経営企画部等管理部門に所属しているものであります。

(2) 提出会社の状況

2019年3月31日現在

従業員数（人）	平均年齢（歳）	平均勤続年数（年）	平均年間給与（円）
501	42.5	17.8	6,904,753

- (注) 1. 従業員数は就業人員数（当社から社外への出向者を除き、社外から当社への出向者を含みます。）であります。
2. 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。
3. 平均勤続年数は、定年後の再雇用、継続雇用者も入社日より通算して計算しております。

(3) 労働組合の状況

当社グループには、大末建設労働組合と称する労働組合があり、1979年2月3日に結成され、上部団体である日本基幹産業労働組合連合会に加盟しております。

なお、労使関係について特に記載すべき事項はありません。

第2【事業の状況】

(注) 「第2 事業の状況」における各事項の記載については、消費税等抜きの金額で表示しております。

1【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

当社グループは、誠実をもってお客様の信頼を得るという一貫した理念に基づき、建設業を通じて豊かな人間生活に貢献することを経営理念としております。当社グループの強みは、「お客様の期待に応える対応力」と「高い技術と革新性を常に追求する姿勢」であり、洗練された最高の住環境をお客様と共に創り上げる総合建設企業として、日々夢をもって技術向上を目指し、研鑽を積んでまいります。

国内建設市場は、東京五輪関連工事や首都圏の再開発、大阪万博などの影響により、資材価格や人件費の高騰、労務状況の逼迫に伴う、建設コストの上昇が危惧されますが、受注環境は引き続き堅調に推移するものと考えております。

このような情勢のなか、当社グループは、2017年度よりスタートいたしました中期経営計画「DAISUË SINKA 2020」では、持続的成長に向け、マンション事業で安定的な収益を確保しながら、建設・リニューアル事業をより強固なものとし、全社方針である「更なる経営基盤の強化による信頼確立」を目指してまいります。

また、お客様の満足を実現するために、株主、協力会社、地域社会等の皆様と共生し、社員と家族が安心できる、誇りとやりがいをもって働ける組織づくりを目指してまいります。

さらに、今後も安定した配当を継続するための財務体質の強化、継続的な発展を可能にする人材育成に注力し、企業価値の更なる向上に努めてまいります。

同時に、内部統制の強化、コンプライアンスの徹底等、社会的責任への対応も継続し、建設業を通じて豊かな人間生活に貢献すべく、全社一丸となって取り組んでまいります。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

2【事業等のリスク】

当社グループの事業展開に影響を及ぼす可能性のあるリスクについては、建設業の特性である工事の着工から完成引渡しまでの期間が長いという事情があり、以下の項目を認識しております。

なお、以下の項目には将来に関する事項が含まれておりますが、当該事項は当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

(1) 事業環境の変化に伴うリスク

住宅市場動向、公共投資の大幅な変動等があった場合、業績等に影響を及ぼす可能性があります。

(2) 資材価格等の変動に伴うリスク

労務賃金、原材料等の価格が高騰した場合、業績等に影響を及ぼす可能性があります。

(3) 取引先の信用リスク

工事代金を受領する前に取引先が信用不安等に陥った場合、業績等に影響を及ぼす可能性があります。

(4) 災害発生に伴うリスク

施工中に天候等の原因により予期せぬ災害が発生した場合、業績等に影響を及ぼす可能性があります。

(5) 瑕疵担保リスク

設計、施工等において重大な瑕疵が発生し、瑕疵担保責任による損害賠償が発生した場合、業績等に影響を及ぼす可能性があります。

(6) 法的規制リスク

当社グループの事業は、建設業法、建築基準法、宅地建物取引業法、都市計画法、会社法、金融商品取引法、独占禁止法、環境労働関連法令等による法的規制を受けておりますが、これらの法律の改廃、法的規制の新設、適用基準の変更等がなされた場合、業績等に影響を及ぼす可能性があります。

3 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

(1) 経営成績等の状況の概要

当連結会計年度における当社グループ（当社及び連結子会社）の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フロー（以下「経営成績等」という。）の状況の概要は以下のとおりであります。

① 財政状態及び経営成績の状況

当連結会計年度におけるわが国経済は、輸出や生産の一部に弱さもみられ、海外経済の動向と政策に関する不確実性、金融市場の変動の影響があったものの、政府による各種政策の効果もあって緩やかな回復基調で推移いたしました。

この間、当建設業界においては、住宅建設は概ね横ばいとなっておりますが、公共投資のこのところの弱含み、建設費の動向や労働者不足に懸念のある状況が続いております。

このような情勢のなか、当社グループは、中期経営計画「DAISUE SINKA 2020」（2017年度～2019年度）の目標達成を目指して営業活動を展開した結果、財政状態及び経営成績は以下の通りとなりました。

a. 財政状態

当連結会計年度末の総資産は、前連結会計年度比5,523百万円増の43,622百万円となりました。当連結会計年度末の負債合計は、前連結会計年度比2,955百万円増の27,200百万円となりました。当連結会計年度末の純資産合計は、前連結会計年度比2,568百万円増の16,421百万円となりました。

b. 経営成績

受注高が63,806百万円（前連結会計年度比12.4%減）、売上高は64,864百万円（前連結会計年度比22.7%増）、繰越工事高は63,297百万円（前連結会計年度比0.3%減）となりました。利益面につきましては、営業利益が3,899百万円（前連結会計年度比49.9%増）、経常利益が3,882百万円（前連結会計年度比47.6%増）、親会社株主に帰属する当期純利益が2,815百万円（前連結会計年度比52.3%増）となりました。

なお、当社グループは単一の報告セグメントのためセグメント情報の記載は行っておりません。

②キャッシュ・フローの状況

営業活動によるキャッシュ・フローは、仕入債務の増加などにより、5,968百万円の資金の増加（前連結会計年度は9,010百万円の資金の増加）となりました。

投資活動によるキャッシュ・フローは、投資有価証券の売却による収入などにより、463百万円の資金の増加（前連結会計年度は554百万円の資金の減少）となりました。

また、財務活動によるキャッシュ・フローは、長期借入金の返済による支出などにより、790百万円の資金の減少（前連結会計年度は3,782百万円の資金の減少）となりました。

これらの結果、当連結会計年度における現金及び現金同等物は、前連結会計年度より5,641百万円増加し、13,524百万円となりました。

③生産、受注及び販売の実績

当社グループでは生産実績を定義することが困難であるため、「生産の実績」は記載していません。

a. 受注実績

(単位：百万円)

区分	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
建設事業	72,866	63,806
合計	72,866	63,806

(注) 当社グループにおいては建設事業以外では受注生産形態をとっていません。

b. 売上実績

(単位：百万円)

区分	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
建設事業	51,973	64,012
その他	899	851
合計	52,872	64,864

(注) 売上高総額に対する割合が100分の10以上の相手先別の売上実績及びその割合は、次のとおりであります。

前連結会計年度

穴吹興産株式会社 6,754百万円 12.8%

当連結会計年度

売上高総額に対する割合が100分の10以上の相手先はありません。

なお、参考のため提出会社個別の事業の状況は次のとおりであります。

建設事業における受注工事高及び施工高の状況

a. 受注工事高、完成工事高、繰越工事高及び施工高

(単位：百万円)

期別	区分	期首繰越 工事高	期中受注 工事高	計	期中完成 工事高	期末繰越 工事高
前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	建築工事	42,562	71,457	114,019	50,614	63,404
	土木工事	—	—	—	—	—
	計	42,562	71,457	114,019	50,614	63,404
当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	建築工事	63,404	62,241	125,646	62,680	62,966
	土木工事	—	—	—	—	—
	計	63,404	62,241	125,646	62,680	62,966

(注) 1. 前事業年度以前に受注した工事で、契約の変更により請負金額の増減がある場合は、期中受注工事高にその増減額を含みます。したがって、期中完成工事高にもかかる増減額が含まれます。
2. 期末繰越工事高は(期首繰越工事高+期中受注工事高-期中完成工事高)であります。

b. 受注工事高の受注方法別比率

工事の受注方法は、特命と競争に大別されます。

(単位：%)

期別	区分	特命	競争	計
前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	建築工事	60.2	39.8	100
	土木工事	—	—	—
当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	建築工事	55.0	45.0	100
	土木工事	—	—	—

c. 完成工事高

(単位：百万円)

期別	区分	官公庁	民間	計
前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	建築工事	2,594	48,020	50,614
	土木工事	—	—	—
	計	2,594	48,020	50,614
当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	建築工事	5,955	56,724	62,680
	土木工事	—	—	—
	計	5,955	56,724	62,680

(注) 完成工事高総額に対する割合が100分の10以上の相手先別の完成工事高及びその割合は、次のとおりであります。

前事業年度

穴吹興産株式会社

6,754百万円

13.3%

当事業年度

完成工事高総額に対する割合が100分の10以上の相手先はありません。

d. 手持工事高（2019年3月31日現在）

（単位：百万円）

区分	官公庁	民間	計
建築工事	6,480	56,486	62,966
土木工事	—	—	—
計	6,480	56,486	62,966

(2) 経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討内容

経営者の視点による当社グループの経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容は以下のとおりであります。

なお、文中における将来に関する事項は、有価証券報告書提出日現在において当社グループが判断したものであります。

当連結会計年度の経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容

①財政状態

<資産>

当連結会計年度末の総資産は、前連結会計年度比5,523百万円増の43,622百万円となりました。流動資産は前連結会計年度比5,698百万円増の38,757百万円、固定資産は前連結会計年度比175百万円減の4,864百万円となりました。

流動資産増加の主な要因は、「現金預金」が5,668百万円増加したことなどによるものです。

<負債>

当連結会計年度末の負債合計は、前連結会計年度比2,955百万円増の27,200百万円となりました。流動負債は前連結会計年度比3,108百万円増の24,377百万円、固定負債は前連結会計年度比153百万円減の2,822百万円となりました。

流動負債増加の主な要因は、「電子記録債務」が3,741百万円増加したことなどによるものです。

<純資産>

当連結会計年度末の純資産合計は、前連結会計年度比2,568百万円増の16,421百万円となりました。

増加の主な要因は、親会社株主に帰属する当期純利益の計上等により「利益剰余金」が2,606百万円増加したことなどによるものです。

②経営成績

<受注高>

当連結会計年度の受注高は、住宅建設は概ね横ばいとなっておりますが、公共投資のこのところの弱含み、建設費の動向や労働者不足に懸念のある状況が続く中、中期経営計画「DAISUE SINKA 2020」（2017年度～2019年度）の目標達成を目指して受注活動を行った結果、前連結会計年度比9,059百万円減（12.4%減）の63,806百万円となりました。

<売上高>

売上高につきましては、前年度からの繰越工事高増加等により、「完成工事高」が前連結会計年度比12,039百万円増（23.2%増）の64,012百万円、「不動産事業等売上高」が前連結会計年度比48百万円減（5.4%減）の851百万円となり、全体の売上高につきましては、前連結会計年度比11,991百万円増（22.7%増）の64,864百万円となりました。

<利益>

(営業利益)

売上高の増加により、売上総利益につきましては、前連結会計年度比1,254百万円増(23.8%増)の6,528百万円となりました。

売上総利益が増加したことにより、営業利益につきましては前連結会計年度比1,298百万円増(49.9%増)の3,899百万円となりました。

(経常利益)

営業外収益につきましては、前連結会計年度比30百万円減(25.0%減)の90百万円となりました。営業外費用につきましては、「支払手数料」が24百万円増加したことなどにより、前連結会計年度比16百万円増(17.7%増)の108百万円となりました。

これらの結果、経常利益につきましては、前連結会計年度比1,252百万円増(47.6%増)の3,882百万円となりました。

(税金等調整前当期純利益及び親会社株主に帰属する当期純利益)

税金等調整前当期純利益は、前連結会計年度比1,543百万円増(58.6%増)の4,177百万円となり、「法人税、住民税及び事業税」と「法人税等調整額」を差引いた親会社株主に帰属する当期純利益につきましても、前連結会計年度比966百万円増(52.3%増)の2,815百万円となりました。

③キャッシュ・フロー

a. キャッシュ・フロー

営業活動によるキャッシュ・フローは、5,968百万円の資金の増加(前連結会計年度は9,010百万円の資金の増加)となりました。

主な要因は、仕入債務3,632百万円の増加及び税金等調整前当期純利益4,177百万円を計上したことなどによるものです。

投資活動によるキャッシュ・フローは、463百万円の資金の増加(前連結会計年度は554百万円の資金の減少)となりました。

主な要因は、投資有価証券の売却による収入550百万円などによるものです。

また、財務活動によるキャッシュ・フローは、790百万円の資金の減少(前連結会計年度は3,782百万円の資金の減少)となりました。

主な要因は、長期借入金456百万円減少したことなどによるものです。

(参考) キャッシュ・フロー関連指標の推移

	2015年3月期	2016年3月期	2017年3月期	2018年3月期	2019年3月期
自己資本比率(%)	19.4	23.8	29.8	36.4	37.6
時価ベースの自己資本比率(%)	26.1	23.9	26.1	29.3	22.3
キャッシュ・フロー対有利子負債比率(年)	7.4	3.8	3.0	0.2	0.2
インタレスト・カバレッジ・レシオ(倍)	8.0	17.5	30.5	506.4	530.0

(注) 自己資本比率：自己資本／総資産

時価ベースの自己資本比率：株式時価総額／総資産

キャッシュ・フロー対有利子負債比率：有利子負債／キャッシュ・フロー

インタレスト・カバレッジ・レシオ：キャッシュ・フロー／利払い

※各指標は、いずれも連結ベースの財務数値により算出しております。

※株式時価総額は、期末株価終値×期末発行済株式数(自己株式控除後)により算出しております。

※キャッシュ・フローは、連結キャッシュ・フロー計算書の営業活動によるキャッシュ・フローを使用しております。また、利払いについては連結キャッシュ・フロー計算書の利息の支払額を使用しております。

※有利子負債は、連結貸借対照表に計上されている負債のうち利子を支払っている全ての負債を対象としております。

b. 資本の財源及び資金の流動性

当社グループは、事業活動のための適切な資金調達、適切な流動性の維持及び財務構造の安定化を図ることを基本方針としております。

運転資金需要のうち主なものは、工事完成までの外注費用等の支出金並びに人件費をはじめとする販売費及び一般管理費であり、金融機関からの借入、社債の発行により調達しております。

4 【経営上の重要な契約等】

(1) 株式会社三菱UFJ銀行とのコミットメントライン契約

当社は、資金調達の機動性を確保するため、株式会社三菱UFJ銀行との間でコミットメントライン契約を締結しております。2019年3月28日付で極度額7,000百万円にて更新しております。

(2) ミサワホーム株式会社との資本業務提携契約

当社は、当社の建築における蓄積されたノウハウと、ミサワホーム株式会社の「住まい」における深い知見を人材交流等を通じ共有することで、互いの強みを活かした事業戦略を推進し、両社の更なる成長を目指していくため、2018年5月8日付で、ミサワホーム株式会社との間で資本業務提携契約を締結しております。

この資本業務提携契約は、当社が展開するマンション事業、医療福祉施設・教育施設等の一般建設事業、耐震改修・コンバージョン等のリニューアル事業の3事業のうち、経営課題としているリニューアル事業において「売上高の2割を担える事業基盤づくり」の取り組みに有効であるとの結論に達し行うことといたしました。

5 【研究開発活動】

当社は、多様な社会ニーズや今後の労働者不足に技術面から対応すべく、同業他社との共同研究を含め、施工品質確保・生産性の向上・ICTの推進に取り組んでおります。

当連結会計年度における研究開発費は47百万円でありました。また、当社の研究開発体制及び当連結会計年度の主な研究開発の成果は次のとおりであります。

なお、子会社においては、研究開発活動は行っておりません。

(1) 当社独自の研究開発

① ICT技術の活用と推進

作業所業務の効率化、生産性の向上、施工品質の向上、経費削減を目的に独自開発した、配筋検査・日常管理システムを2018年4月より導入を開始し、これまでに80%以上の作業所で運用しています。配筋検査システムについては特許を取得しております。

この配筋検査システムでは、これまで配筋写真に掛かっていた業務が1/3程度短縮できております。また、日常管理システムも毎日使用するため、工期全体で大きな効果が得られております。今後も更に他の工種での運用に向けて新たなシステム開発に努めると共に、既存システムの改良を進めていきます。

② 鼻先P C a 工法の採用

従来から当社保有技術として採用している鼻先P C a 工法について、品質確保・瑕疵低減を目的に採用の拡大・定着をすべく作業所への供給システムの確立に取り組んでおります。また、鼻先P C a の技術を応用して、他の部位へのP C a 採用により作業所の品質確保・工期短縮になる取り組みを進めております。

(2) 同業他社との共同開発

①柱RC梁Sハイブリッド構法の推進

大規模案件に対応可能な工業化・合理化構法の確立や物流倉庫、工場等の長スパン建物に要求される躯体のローコスト技術として検討を続けており、今後の広い運用に向けて取り組みを行っております。

②杭頭半固定工法

杭頭半固定工法の採用に向け、同業他社との連携による施工部会に参加し、更なる工法の改良と設計データの収集・分析を続けております。当連結会計年度は、施工手順、施工要領の作成及び各ツールの見直しを行っております。

③サステナブル社会の実現に向けたシステム開発

サステナブル建築（※）の推進を効果的に実施できるように、建築物のライフサイクル（企画・設計から解体に至るまで）を通して発生するコスト、CO₂排出量、エネルギー消費量などの検討を行うことができるソフトの開発に取り組んでおります。

※サステナブル建築

設計・施工・運用の各段階を通じて、地域レベルでの生態系の収容力を維持しうる範囲内で、(1)建築のライフサイクルを通じての省エネルギー・省資源・リサイクル・有害物質排出抑制を図り、(2)その他地域の気候、伝統、文化及び周辺環境と調和しつつ、(3)将来にわたって人間の生活の質を適度に維持あるいは向上させていくことができる建築物を構築することを指します。

④タイル剥落防止工法に関する共同開発

建物の外壁仕上げに使用されているタイルの剥落は人的・物的災害につながる恐れがあります。本工法は基布に繊維を植え込んだシートを型枠に貼り付けることにより、下地コンクリート表面に繊維が植え込まれ、その繊維がタイルの張り付けモルタルに入り込むことにより、コンクリートと張り付けモルタルが機械的に結合される剥落防止技術であります。共研フォーラムでの共同研究として取り組み、性能証明を取得しております。今後は作業所での採用に向けて取り組んでいきます。

(3) 外部技術や既存工法の活用等による技術力の向上

①基礎工事省力化の推進

従来より採用している、コンクリート基礎・地中梁が不要となる、上部構造と杭を直接接合するECS-T P工法の採用を定着することにより、物件を短工期で安定的に提供できるように取り組んでいます。

②躯体工事の生産性向上・品質安定の取り組み

従来より採用している、柱RC梁Sハイブリッド構法の採用拡大に向けて、更に品質向上・工期短縮効果が発揮できるように取り組んでいます。また、安定した品質確保及び工期短縮効果が期待できる、鉄筋ジャバラユニット工法の採用に向けて取り組んでいます。

③低炭素社会実現への取り組み

型枠工事においてCO₂削減効果が期待できる、鋼製パネルを埋め戻しの基礎部分に積極的に採用できるように取り組んでいます。

④i-Constructionによる作業所業務効率化と品質向上への取り組み

ICTの推進として、作業所にタブレットを活用した配筋検査システムの導入を拡大して採用しております。これにより躯体工事の現場員の業務効率化と品質の向上に効果を発揮しております。また、BIM推進プロジェクトを立ち上げ、BIM活用の強化に努めており、今後の作業所の生産性向上・品質向上につなげていきます。

第3【設備の状況】

(注) 「第3 設備の状況」における各事項の記載については、消費税等抜きの金額で表示しております。

1【設備投資等の概要】

当社グループでは、業務効率の向上等を図ることを目的とし、基幹システムの追加開発で19百万円の設備投資を実施しました。

なお、当連結会計年度において重要な設備の除却、売却等はありません。

2【主要な設備の状況】

(1) 提出会社

2019年3月31日現在

事業所 (所在地)	帳簿価額 (百万円)						従業員数 (人)	
	建物 構築物	運搬具 工具器具 備品	土地		リース 資産	ソフト ウェア		合計
			面積 (㎡)	金額				
本社・大阪本店 (大阪府中央区)	12	18	—	—	2	163	197	207
東京本店 (東京都江東区)	528	15	1,538	807	8	1	1,360	222

(注) 1. 提出会社は単一の報告セグメントであるため、セグメント別の記載はせず、主要な事業所ごとに一括して記載しております。大半の設備は建設事業又は共通的に使用されております。

2. 土地及び建物の一部を連結会社以外から賃借しております。賃借料は80百万円であります。

(2) 国内子会社

2019年3月31日現在

会社名	事業所 (所在地)	区分	帳簿価額 (百万円)				従業員数 (人)	
			建物 構築物	機械 運搬具 工具器具 備品	土地			合計
					面積 (㎡)	金額		
大末テクノサービス(株)	本店 (大阪府中央区)	建設事業 その他	59	6	11,901	82	148	68

(注) 上記には支店等が含まれております。

3【設備の新設及び除却等の計画】

前連結会計年度に引き続き、再構築を行った基幹システムの機能向上の投資を計画しております。

第4【提出会社の状況】

1【株式等の状況】

(1)【株式の総数等】

①【株式の総数】

種類	発行可能株式総数（株）
普通株式	42,456,900
計	42,456,900

②【発行済株式】

種類	事業年度末現在発行数（株） (2019年3月31日)	提出日現在発行数（株） (2019年6月25日)	上場金融商品取引所名又は登録認可金融商品取引業協会名	内容
普通株式	10,614,225	10,614,225	東京証券取引所 市場第一部	単元株式数 100株
計	10,614,225	10,614,225	—	—

(2)【新株予約権等の状況】

①【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

②【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

③【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (株)	発行済株式 総数残高 (株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
2014年8月1日	△95,528,025	10,614,225	△982	4,324	—	—

(注) 会社法第447条第1項の規定に基づき、資本金の額の減少を行っております。

また、10株につき1株の割合で株式併合を行っております。

(5) 【所有者別状況】

2019年3月31日現在

区分	株式の状況（1単元の株式数100株）							計	単元未満株式の状況（株）
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他		
					個人以外	個人			
株主数（人）	-	25	27	67	81	2	4,002	4,204	-
所有株式数（単元）	-	21,601	1,614	31,747	17,391	4	32,181	104,538	160,425
所有株式数の割合（%）	-	20.66	1.54	30.37	16.64	0.00	30.79	100.00	-

- (注) 1. 自己株式171,849株は、「個人その他」に1,718単元及び「単元未満株式の状況」に49株を含めて記載しております。なお、株主名簿記載上の自己株式数は171,999株であります。期末日現在の実質的な所有株式数は171,849株であります。
2. 「その他の法人」及び「単元未満株式の状況」の欄には、株式会社証券保管振替機構名義の株式が、それぞれ18単元及び50株含まれております。

(6) 【大株主の状況】

2019年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	発行済株式(自己 株式を除く。)の 総数に対する所有 株式数の割合 (%)
ミサワホーム株式会社	東京都新宿区西新宿二丁目4番1号	2,042	19.55
日本トラスティ・サービス信託 銀行株式会社(信託口)	東京都中央区晴海一丁目8番11号	636	6.09
双日株式会社	東京都千代田区内幸町二丁目1番1号	618	5.93
BNP PARIBAS SECURITIES SERVICES LUXEMBOURG / JASDEC / ACCT B P 2 S DUBLIN CLIENTS - AIFM (常任代理人 香港上海銀行東京支店)	33 RUE DE GASPERICH, L-5826 HOWALD-HE SPERANGE, LUXEMBOURG (東京都中央区日本橋三丁目11番1号)	578	5.54
株式会社三菱UFJ銀行	東京都千代田区丸の内二丁目7番1号	387	3.71
日本マスタートラスト信託銀行 株式会社(信託口)	東京都港区浜松町二丁目11番3号	382	3.66
株式会社大京	東京都渋谷区千駄ヶ谷四丁目24番13号	239	2.30
大東建設株式会社大親会持株会	大阪府中央区久太郎町二丁目5番28号	234	2.24
山本 良継	大阪府松原市	194	1.87
岩崎 泰次	静岡県駿河区	178	1.71
計	—	5,493	52.60

(注) 1. 上記日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口)及び日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口)の所有株式数は、全て信託業務に係るものであります。

2. 2019年4月16日付で公衆の縦覧に供されている大量保有報告書(変更報告書)において、Arcus Investment Limitedが2019年3月14日現在で以下の株式を所有している旨が記載されているものの、当社として2019年3月31日現在における実質所有株式数の確認ができないので、上記大株主の状況には含めておりません。

なお、その大量保有報告書の内容は次のとおりであります。

氏名又は名称	住所	保有株券等の数 (千株)	株券等保有割合 (%)
Arcus Investment Limited	Room 501 7 stratford Place London W1C 1AY, UK	736	6.94

3. 前事業年度末現在主要株主であった大東建設株式会社は、当事業年度末現在主要株主ではなくなり、ミサワホーム株式会社が新たに主要株主となりました。

(7) 【議決権の状況】

① 【発行済株式】

2019年3月31日現在

区分	株式数 (株)	議決権の数 (個)	内容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式 (自己株式等)	—	—	—
議決権制限株式 (その他)	—	—	—
完全議決権株式 (自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 171,800	—	—
完全議決権株式 (その他)	普通株式 10,282,000	102,820	—
単元未満株式	普通株式 160,425	—	—
発行済株式総数	10,614,225	—	—
総株主の議決権	—	102,820	—

(注) 「完全議決権株式 (その他)」欄には、株式会社証券保管振替機構名義の株式が1,800株含まれております。また、「議決権の数」欄には、同機構名義の完全議決権株式に係る議決権の数18個が含まれております。

② 【自己株式等】

2019年3月31日現在

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式総数 に対する所有株式 数の割合 (%)
(自己保有株式) 大末建設株式会社	大阪市中央区久太郎 町二丁目5番28号	171,800	—	171,800	1.62
計	—	171,800	—	171,800	1.62

2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第7号に該当する普通株式の取得

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数 (株)	価額の総額 (円)
当事業年度における取得自己株式	2,592	3,153,640
当期間における取得自己株式	66	62,280

(注) 当期間における取得自己株式には、2019年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式は含まれておりません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数 (株)	処分価額の総額 (円)	株式数 (株)	処分価額の総額 (円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	—	—	—	—
消却の処分を行った取得自己株式	—	—	—	—
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	—	—	—	—
その他(単元未満株式の売渡請求による売渡)	—	—	—	—
保有自己株式数	171,849	—	171,915	—

- (注) 1. 当期間における処理自己株式数には、2019年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の売渡による株式は含まれておりません。
2. 当期間における保有自己株式数には、2019年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取及び売渡による株式は含まれておりません。

3 【配当政策】

株主に対する配当の基本的な方針は、株主の裾野拡大を視野に入れた持続的・安定的な株主還元を念頭に、当期の業績、将来の見通し等を総合的に勘案して決定すべきものと考えております。

配当の決定機関は、株主総会または取締役会であります。当社は、会社法第459条第1項の規定に基づき、取締役会の決議をもって剰余金の配当等を行うことができる旨を定款に定めております。

当事業年度の期末配当につきましては、上記方針に基づき、1株当たり20円とさせていただきます。

また、次期の配当につきましては、1株当たり20円増配し、年40円（中間配当20円、期末配当20円）とする予定であります。

内部留保資金につきましては、経営基盤の長期安定に向けた財務体質の強化及び事業の継続的な拡大発展を実現させるための資金として活用していく所存であります。

なお、当事業年度に係る剰余金の配当は以下のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額(百万円)	1株当たりの配当 (円)
2019年5月22日 取締役会決議	208	20

4 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの概要】

以下の内容は、有価証券報告書提出日現在の状況であります。

(コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方)

当社は、広く社会から信頼され、必要とされ続ける企業であることを目指し、監査等委員会設置会社への移行を行い、さらなる透明性、健全性の維持と執行役員制度による意思決定の迅速化、効率化を図っております。

今後も継続的に企業価値を高めていくことで、実効性のあるコーポレート・ガバナンス体制の構築に努めてまいります。

(イ) 企業統治の体制の概要及び当該体制を採用する理由

(1) 当社は、監査等委員会設置会社制度を採用しております。経営の透明性・公正性を確保するため、コーポレート・ガバナンス体制の主たる機関として、取締役会、監査等委員会を設置し、その補完機関として人事・組織委員会、指名諮問委員会及び報酬諮問委員会、経営会議などを設置しております。

取締役会は、監査等委員である取締役3名を含む取締役12名（うち社外取締役5名）で構成されております。取締役会は月1回以上開催し、重要な事項については、必要に応じて取締役会の諮問機関である人事・組織委員会、指名諮問委員会及び報酬諮問委員会、社長の諮問機関である経営会議での検討を経て、取締役会で執行決定しております。また当社は、執行役員制度を導入し、取締役会を「経営の基本的な方針の決定と業務執行の監督機関」と位置付け、執行役員は、取締役会が決定した基本方針に従って業務執行を行っております。

監査等委員会は、社外取締役2名を含む監査等委員3名によって構成されております。監査等委員会は、定期的で開催し、また監査等委員は、原則として監査等委員会に全員が出席し、取締役の職務執行に関して、適法性、妥当性等の観点から業務監査を実施しております。監査等委員の過半数は社外取締役で構成されており、中立で幅広い視点からの経営監視機能を確保しております。

人事・組織委員会は、取締役会の諮問機関として、重要な人事及び組織関連事項等を審議しております。

指名諮問委員会は、取締役会の諮問機関として、取締役の人事に関する事項を審議することにより、決定プロセスの透明性・客観性を確保しております。

報酬諮問委員会は、取締役会の諮問機関として、取締役の報酬等に関する事項を審議することにより、決定プロセスの透明性・客観性及び取締役報酬体系・水準の妥当性を確保しております。

経営会議は、社長の諮問機関として、経営の根幹に係わる特に重要な事項、取締役会に付議する事項のうち事前協議を必要とするもの等を審議しております。

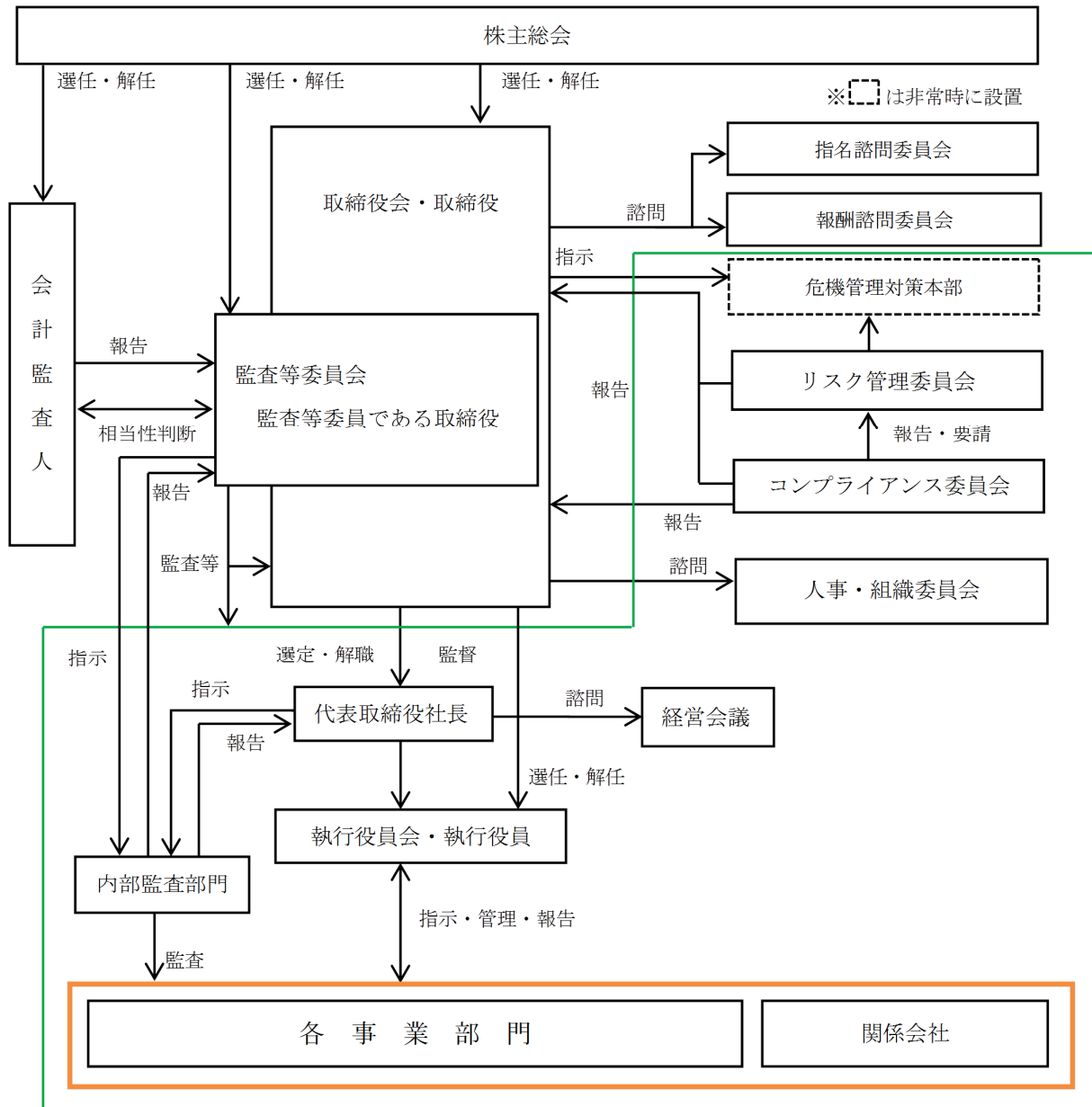
機関ごとの構成員は次の通りであります。（◎は議長、委員長を表す。）

役職名	氏名	取締役会	監査等 委員会	人事・組 織委員会	指名諮問 委員会	報酬諮問 委員会	経営会議
代表取締役社長	日高 光彰	◎		◎	◎	○	◎
取締役	前田 延宏	○		○			○
取締役	村尾 和則	○		○			○
取締役	郷右近英弘	○		○			○
取締役	小澤 和夫	○		○			○
取締役	片岡 基宏	○		○			○
社外取締役（注）	神谷 國廣	○			○	◎	
社外取締役	作尾 徹也	○					
社外取締役	佐藤 徹	○					
取締役	林 憲二	○	◎				
社外取締役（注）	中島 馨	○	○		○	○	
社外取締役（注）	藤野 英男	○	○		○	○	
執行役員 経営企画部長	石丸 将仁			○			
人事部長	西尾 章			○			

（注）社外取締役 神谷國廣、中島馨、藤野英男は、独立社外取締役であります。

- (2) 当社は、取締役（監査等委員である取締役を除く。）を10名以内、監査等委員である取締役は5名以内とする旨を定款で定めております。
- (3) 当社は、取締役の選任決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨を、また累積投票によらない旨も定款で定めております。
- (4) 当社は、資本政策を迅速に遂行するため、会社法第165条第2項の定めにより、取締役会の決議をもって市場取引等により自己株式を取得することができる旨を定款で定めております。
- (5) 当社は、会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議要件について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨を定款に定めております。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものであります。
- (6) 当社は、剰余金の配当等会社法第459条第1項各号に定める事項について、法令に別段の定めがある場合を除き、取締役会の決議により定めることができる旨を定款に定めております。これは、剰余金の配当等を取締役会の権限とすることにより、株主への機動的な利益還元を行うことを目的とするものであります。

(7) 経営上の意思決定、執行及び監督に係る経営管理組織その他のコーポレート・ガバナンス体制は次のとおりであります。



(ロ) 業務の適正を確保するための体制

(1) 取締役及び使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制

当社は、取締役及び執行役員が企業活動の基本的な考え方を表した「大末建設グループ行動規範」を率先して垂範すると共に、当社グループの取締役及び使用人に繰り返し伝えることにより企業倫理の浸透に努め、コンプライアンスが企業活動の前提である事を徹底しております。

また、企業倫理・コンプライアンスの一層の強化を図るため、コンプライアンス委員会を開催し、違反行為の原因分析と再発防止策について取締役会及び監査等委員会に報告を行っております。通常の報告ルートとは異なる内部通報制度（コンプライアンス・ホットライン）を社内と社外に設け、通報者に不利益な扱いはしない事を定めるとともに、不正行為の早期発見と是正に努めております。

定期的に内部監査部門による監査を実施し、関連法規及び社内規則の遵守の徹底とリスク思考に基づく内部統制の検証を図ることとしております。

(2) 取締役の職務の執行に係る情報の保存及び管理に関する体制

取締役の職務の執行に係る情報は、社内規程に定めるところにより、文書又は電磁的媒体に記録し、適切に保存及び管理することとしております。取締役はそれらの情報を閲覧できるものとしております。

(3) 損失の危険の管理に関する規程その他の体制

当社は、「リスク管理基本規程」を制定しております。本規程は、当社及び関係会社のリスクを予防し、またリスクが発生した場合には、迅速かつ的確に対応することにより被害を最小限に食い止め、再発を防止し、当社グループの企業価値を保全することを目的としております。本規程に基づき、経営企画部担当役員を委員長とするリスク管理委員会を開催するほか、重大なリスクが発生する場合には適宜開催し、その対策等については取締役会に報告をすることとしております。各部門別にリスク管理責任者を置いて、リスク管理を適切に行い、リスク発生の回避に努め、損失を最小限に食い止めるための対策を講じております。

当社は、「危機管理マニュアル」を制定し、リスク管理委員会が、安全確保及び事業継続面において、非常事態が避けられないと判断した場合は、代表取締役社長を対策本部長とする危機管理対策本部を設置し、損失拡大の防止と企業価値の保全に努めるものとしております。また、BCP（事業継続計画）を策定しております。

(4) 取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制

当社は、経営の意思決定・監督機能と業務執行機能を分離する執行役員制度を導入し、権限と責任を明確にしております。取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するため、取締役会を月1回定時に開催するほか、必要に応じて適宜開催し、また、執行役員会を開催しております。

さらに、経営に関する重要事項については、必要に応じて社長の諮問機関である経営会議での検討を経て、取締役会で執行決定を行うものとし、決定された業務の執行状況は、担当する取締役又は執行役員が取締役会などにおいて、適宜報告しております。

(5) 当社並びにその子会社から成る企業集団における業務の適正を確保するための体制

(a) 子会社の取締役等の職務の執行に係る事項の当社への報告に関する体制

当社は、「関係会社管理規程」に従い、子会社の営業成績、財務状況その他の重要な情報について定期的な報告を義務付けております。

(b) 子会社の損失の危険の管理に関する規程その他の体制

当社は、「リスク管理基本規程」及び「関係会社管理規程」を制定し、経営企画部を子会社の管理部門として定期的に指導、管理を行うとともに、リスク管理委員会を設置し、当社グループ全体のリスクマネジメント推進に係わる課題・対応策を審議しております。

(c) 子会社の取締役等の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制

当社は、当社グループ各社が社内規則において明確化された職務分掌及び権限に基づいて業務運営を行う体制とし、業務の専門化・高度化を図っております。また、この体制の中で、重要度に応じて職務権限を委任できることとし意思決定の迅速化を図っております。

(d) 子会社の取締役等及び使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制

当社は、「大末建設グループ行動規範」を作成し、当社グループの全ての取締役及び使用人に周知徹底しております。定期的にコンプライアンス通信を発行し、取締役及び使用人のコンプライアンス意識の啓蒙を図っており、社内と社外にコンプライアンス・ホットラインを設け、不正行為の早期発見と是正に努めております。

- (6) 監査等委員会の職務を補助すべき使用人の取締役（監査等委員である取締役を除く。）からの独立性及び当該使用人に対する指示の実効性の確保に関する事項
- (a) 監査等委員会の職務を補助すべき使用人に関する事項及び使用人の取締役（監査等委員である取締役を除く。）からの独立性に関する事項
- 監査等委員会の職務を補助する使用人は内部監査部門に所属する使用人とし、監査等委員会は、必要に応じて同部門に所属する使用人に対して監査業務に必要な事項を命令することができるものとしております。
- また、監査等委員会から監査業務に必要な命令を受けて監査業務を行う使用人は、その命令の範囲に属する業務に関して取締役（監査等委員である取締役を除く。）の指揮命令を受けないものとし、当該使用人の人事異動、人事考課については監査等委員会の意見を聴取し、尊重するものとしております。
- (b) 監査等委員会の職務を補助すべき使用人に対する指示の実効性の確保に関する事項
- 当社は、監査等委員会の職務を補助すべき使用人に関し、監査等委員会の職務を補助する事項に対して監査等委員会の指示命令に従うこととしております。
- (7) 監査等委員会への報告に関する体制
- (a) 取締役（監査等委員である取締役を除く。）及び使用人が監査等委員会に報告するための体制
- 取締役（監査等委員である取締役を除く。）及び使用人は、監査等委員会に対して、法定の事項に加え全社的に重大な影響を及ぼす事項、内部監査の結果と改善状況、内部通報制度を利用した通報の状況及びその内容、その他監査等委員会がその職務遂行上報告を受ける必要があると判断した事項について、速やかに報告、情報提供を行うものとしております。
- (b) 子会社の取締役・監査役等及び使用人又はこれらの者から報告を受けた者が当社の監査等委員会に報告をするための体制
- 子会社の取締役及び使用人は、当社監査等委員会から業務執行に関する事項について報告を求められたときは、速やかに適切な報告を行うものとしております。
- (c) 監査等委員会へ報告した者が当該報告をしたことを理由として不利な取り扱いを受けないことを確保するための体制
- 当社は、当社の監査等委員会への報告を行った取締役及び使用人に対し、当該報告を行ったことを理由として不利な取り扱いを行うことを禁止し、その旨を当社グループの取締役及び使用人に周知徹底しております。
- (d) 監査等委員の職務の執行について生ずる費用の前払い又は償還の手続きその他の当該職務の執行について生ずる費用又は債務の処理に係る方針に関する事項
- 当社は、監査等委員がその職務の執行について、当社に対し、会社法第399条の2第4項に基づく費用の前払い等の請求をしたときは、当該請求に係る費用又は債務が当該監査等委員会の職務の執行に必要でないと認められた場合を除き、速やかに当該費用又は債務を負担するものとしております。
- (8) その他監査等委員会の監査が実効的に行われることを確保するための体制
- 監査等委員は、必要に応じて、重要な会議に出席することができ、また意見を述べることもできるものとしております。更に、監査等委員会は職務の遂行に必要と判断したときは、前項に定めのない事項においても取締役及び使用人並びに会計監査人に対して報告を求める体制にしております。
- (9) 財務報告の信頼性を確保するための体制
- 当社及び当社グループの財務報告の信頼性を確保するため、経理規程類を整備するとともに、財務報告において不正や誤謬が発生するリスクを管理し、予防及び必要な内部統制シス

テムを整備・運用・評価する体制を構築するとともに、不備があれば必要な是正を行うこととしております。

(10) 反社会的勢力排除に向けた基本的な考え方及びその整備状況

当社グループは、「大末建設グループ行動規範」において反社会的行為への関与を禁止し、社会の秩序や安全に脅威を与える反社会的勢力及び団体に対し一切関与しないことを基本方針としております。反社会的勢力及び団体との関係を根絶するため、不当要求対応のための社内研修を実施するとともに、総務部を対応統括部署として不当要求防止責任者を選任し、不当要求を受けた場合の通報連絡体制を整備するとともに、平素から外部の専門家や専門機関との緊密な連携関係を構築しております。

(ハ) 責任限定契約の内容の概要

当社と取締役（業務執行取締役等である者を除く。）及び監査等委員は、会社法第427条第1項の定めにより、同法第423条第1項に定める責任について、その職務を行うにあたり善意でかつ重大な過失がないときは、会社法第425条第1項に定める最低責任限度額を限度とする旨の契約を締結しております。これは、取締役（業務執行取締役等である者を除く。）及び監査等委員が期待される役割を十分発揮できるようにするためであります。

(2) 【役員の状況】

① 役員一覧

男性12名 女性一名 (役員のうち女性の比率-%)

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (百株)
代表取締役社長	日高 光彰	1948年5月9日生	1967年4月 当社入社 1999年2月 当社九州支店工事部長 2001年10月 当社大阪本店建築部長 2002年10月 当社大阪本店副本店長 2003年4月 当社執行役員 2004年6月 当社取締役 2005年5月 当社常務執行役員 2007年4月 当社マンション事業本部長 2010年4月 当社執行役員副社長 2011年4月 当社代表取締役社長(現任) 執行役員社長(現任) 2017年5月 当社経営企画部担当兼CSR推進室担当 2019年4月 当社営業本部担当兼営業本部長(現任)	(注)3	148
取締役	前田 延宏	1953年8月14日生	1972年4月 当社入社 2008年4月 当社建設事業本部大阪建設事業部副事業部長 2009年4月 当社執行役員 当社生産管理部担当 2011年4月 当社大阪マンション事業部長 2012年1月 当社西日本技術グループリーダー 2012年4月 当社大阪本店技術部長 2013年4月 当社安全環境品質部担当 2015年4月 当社総務部担当(現任) 2015年6月 当社取締役(現任) 大末サービス株式会社(現 大末テクノサー ビス株式会社) 取締役 2015年10月 当社人事部担当(現任) 兼監査部担当 2016年4月 当社常務執行役員 当社安全環境部担当(現任) 兼生産管理部担 当(現任) 2017年4月 当社CS部担当(現任) 2017年5月 当社システム部担当 2018年4月 当社専務執行役員(現任)	(注)3	37
取締役 東京本店長	村尾 和則	1965年1月24日生	1988年4月 当社入社 2010年4月 当社西日本技術グループリーダー 2012年4月 当社大阪本店工事部長 2013年4月 当社執行役員 2015年4月 当社大阪本店長兼名古屋支店担当 2015年6月 当社取締役(現任) 2018年4月 当社常務執行役員(現任) 2019年4月 当社東京本店長(現任)	(注)3	38
取締役 大阪本店長	郷右近 英弘	1960年6月15日生	1987年7月 当社入社 2009年3月 当社建設事業本部東京建設事業部長 2009年4月 当社執行役員 当社建設事業本部副本部長 2010年4月 当社東京建設事業部長 2012年4月 当社東京本店建設営業部長 2013年4月 当社大阪本店長兼名古屋支店担当兼大阪本店 開発事業部長 2013年6月 当社取締役(現任) 2015年4月 当社東京本店長 2019年1月 当社常務執行役員(現任) 2019年4月 当社大阪本店長兼名古屋支店担当(現任)	(注)3	25

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (百株)
取締役	小澤 和夫	1966年12月22日生	1989年4月 当社入社 2007年4月 当社マンション事業本部東京マンション事業 部第1グループリーダー 2013年4月 当社東京本店マンション営業部長 2015年4月 当社執行役員(現任) 2018年4月 当社監査部担当(現任)兼システム部担当 (現任) 2018年6月 当社取締役(現任) 2019年4月 当社CSR推進室担当(現任)	(注)3	26
取締役	片岡 基宏	1965年8月11日生	1989年4月 株式会社三和銀行(現 株式会社三菱UFJ 銀行) 入行 2015年1月 同行玉造支店兼支社 支店長兼支社長 2018年5月 当社入社 執行役員(現任) 当社経営企画部担当(現任)兼CSR推進室 担当 2019年6月 当社取締役(現任)	(注)3	—
取締役	神谷 國廣	1944年8月16日生	1968年4月 株式会社日立製作所入社 1999年4月 同社経理センタ長 2000年4月 同社財務一部長 2002年6月 同社情報・通信グループCOO兼Eソリューション 推進本部長 2004年10月 日立オムロンターミナルソリューションズ株式 会社代表取締役会長就任 2007年3月 同社代表取締役会長退任 2007年6月 日立マクセル株式会社取締役就任監査委員長 2008年10月 社団法人日本監査役協会会計委員会委員 2009年6月 同協会基本問題検討委員会専門委員 2010年6月 日立マクセル株式会社取締役退任 2010年10月 社団法人日本監査役協会基本問題検討委員会專 門委員及び会計委員会委員退任 2011年6月 アンリツ株式会社社外監査役就任 2014年6月 当社取締役(現任) 2015年6月 アンリツ株式会社社外監査役退任	(注)3	28
取締役	作尾 徹也	1955年8月13日生	1981年9月 旧ミサワホーム株式会社入社 2006年6月 ミサワホーム株式会社執行役員 同社商品企画部長 2012年6月 同社常務執行役員 同社ストック事業全般兼営業推進本部副本部長 兼ストック事業本部長 2014年4月 同社商品開発本部長 2014年6月 当社取締役(現任)兼ミサワホーム中国株式会 社取締役(現任) 2016年4月 同社商品開発・技術担当 2016年6月 同社商品開発・技術・設計建設全般(現任) 2017年4月 同社海外事業全般 2018年4月 同社専務執行役員(現任) 2018年6月 当社取締役(現任) 2019年4月 ミサワホーム株式会社CS品質・生産・調達全 般(現任)兼海外事業副担当(現任)兼MAリ ファイニングシステムズ株式会社代表取締役社 長(現任)	(注)3	—

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (百株)
取締役	佐藤 徹	1967年8月20日生	1992年4月 旧ミサワホーム株式会社入社 2006年4月 ミサワホーム東関東株式会社資産活用事業部長 2017年4月 ミサワホーム株式会社開発事業部長 2017年12月 ふじがおか活々交流株式会社取締役(現任) 2018年6月 当社取締役(現任) 2018年10月 ミサワホーム株式会社執行役員 ストック推進・開発事業担当(現任)兼開発事業部長(現任)兼ミサワホーム不動産株式会社取締役(現任) 2019年4月 MAリファイニングシステムズ株式会社取締役(現任)	(注)3	—
取締役 (監査等委員)	林 憲二	1947年5月7日生	1971年4月 当社入社 1997年5月 当社企画管理本部企画部長 1999年6月 当社取締役 2001年3月 当社取締役辞任 2001年4月 当社執行役員 九州支店長 2002年6月 当社取締役 2003年2月 当社人事部長 2004年4月 当社常務取締役 常務執行役員 2005年6月 当社取締役 2008年4月 当社公共関連事業部長兼名古屋支店担当 2010年4月 当社内部統制推進部担当兼管理部担当 2013年6月 当社常勤監査役 2014年3月 大末サービス株式会社(現 大末テクノサービス株式会社) 監査役 テクノワークス株式会社(現 大末テクノサービス株式会社) 監査役 2016年6月 当社取締役(監査等委員)(現任)	(注)4	107
取締役 (監査等委員)	中島 馨	1940年10月1日生	1974年4月 弁護士登録(現在) 1994年4月 大阪弁護士会副会長 2002年5月 株式会社高島屋社外監査役 2007年5月 株式会社高島屋社外取締役(現任) 2007年6月 当社監査役 2016年6月 当社取締役(監査等委員)(現任)	(注)4	11
取締役 (監査等委員)	藤野 英男	1952年7月22日生	1975年4月 株式会社三和銀行(現 株式会社三菱UFJ銀行) 入行 1992年4月 同行豊中支店長 1996年4月 同行日本一支店長 1998年4月 同行堺支店長 2002年8月 同行企業第1部(大阪)部長(部付) 2004年5月 同行取締役執行役員内部監査部長 2004年10月 同行執行役員内部監査部長 2005年6月 同行常勤監査役兼株式会社UFJホールディングス(現 株式会社三菱UFJフィナンシャル・グループ) 監査役兼UFJ信託銀行株式会社(現 三菱UFJ信託銀行株式会社) 監査役 2006年1月 株式会社三菱東京UFJ銀行(現 株式会社三菱UFJ銀行) 常勤監査役 2006年6月 東洋プロパティ株式会社取締役常務執行役員 2010年4月 株式会社心齋橋共同センタービルディング代表取締役 2016年6月 当社取締役(監査等委員)(現任)	(注)4	2
計					422

- (注) 1. 取締役神谷國廣氏、作尾徹也氏、佐藤徹氏、中島馨氏、藤野英男氏は社外取締役であります。
 2. 当社の監査等委員会については次のとおりであります。
 委員長 林憲二
 委員 中島馨、藤野英男
 3. 2019年3月期に係る定時株主総会終結の時から2020年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
 4. 2018年3月期に係る定時株主総会終結の時から2020年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
 5. 当社は執行役員制度を導入しており、取締役会で選任された執行役員は次のとおりであります。

役名	氏名	生年月日	職名及び担当
※執行役員社長	日高 光彰	1948年5月9日生	営業本部担当兼営業本部長
※専務執行役員	前田 延宏	1953年8月14日生	総務部担当兼人事部担当兼安全環境部担当兼生産管理部担当兼CS部担当
※常務執行役員	村尾 和則	1965年1月24日生	東京本店長
※常務執行役員	郷右近 英弘	1960年6月15日生	大阪本店長兼名古屋支店担当
※執行役員	小澤 和夫	1966年12月22日生	監査部担当兼システム部担当兼CSR推進室担当
※執行役員	片岡 基宏	1965年8月11日生	経営企画部担当
執行役員	鶴 浩一郎	1963年10月6日生	東京本店工事部長
執行役員	木原 辰巳	1965年2月19日生	東京本店リニューアル営業部長
執行役員	安藤 康一	1962年9月21日生	大阪本店工事部長
執行役員	葛西 堂弘	1964年5月13日生	東京本店建設営業部長
執行役員	中村 光正	1962年9月13日生	名古屋支店長
執行役員	石丸 将仁	1970年7月7日生	経営企画部長兼営業本部営業推進部長
執行役員	三宅 嘉徳	1971年9月30日生	総務部長
執行役員	林 正彦	1961年12月5日生	東京本店技術部長兼安全環境部副担当兼生産管理部副担当兼CS部副担当
執行役員	下戸 康正	1969年4月30日生	大阪本店マンション営業部長兼大阪本店万博準備室長

- (注) 1. 執行役員の任期は、2019年4月から2020年3月までの事業年度末までであります。
 2. ※印は取締役兼務者であります。

6. 当社は、法令に定める監査等委員である取締役の員数を欠くことになる場合に備え、会社法第329条第3項に定める補欠の監査等委員である取締役1名を選任しております。略歴は次のとおりであります。

氏名	生年月日	略歴	所有株式数 (百株)
前田 春樹	1948年1月2日生	1979年4月 弁護士登録(現在) 1989年9月 前田春樹法律事務所開設(現在) 2003年4月 大阪弁護士会副会長	—

② 社外役員の状況

当社は、社外取締役5名を選任しております。

当社の社外取締役は、取締役会の意思決定の妥当性・適正性の確保、子会社等を含めたグループ全体のガバナンスの強化、業務及び財務の適正性の確保等に貢献するものと考えております。

当社は、独立社外取締役を選任するための会社からの独立性に関する基準または方針を、以下のとおり定めております。

※独立社外取締役の独立性基準

当社は、当社の適正なガバナンスにとって必要な客観性と透明性を確保するために、当社における社外取締役の独立性基準を以下のとおり定め、社外役員が次の項目のいずれかに該当する場合、当社にとって十分な独立性を有していないものとみなします。

- (1) 当社及びその連結子会社（以下当社グループという）の出身者（その就任の前10年間に
おいて）
- (2) 当社の大株主で総議決権数の10%を超える株主及びその業務執行者

- (3) 当社グループの主要な取引先で当社の連結売上高の3%を超える者の業務執行者
- (4) 当社グループから多額（1千万円超）の金銭その他の財産を得ているコンサルタント、会計士、弁護士等の専門家
- (5) 当社グループから多額（1千万円超）の寄付を受けている者
- (6) 当社グループの主要な借入先（連結総資産の5%超）又はその業務執行者（その就任の前10年間において）
- (7) 近親者（2親等以内）が上記(1)から(6)までのいずれかに該当する者
- (8) 過去5年間において、上記(2)から(5)までのいずれかに該当していた者
- (9) 上記に掲げる事項のほか、当社から独立した立場をもって社外役員としての職務を果たせないと合理的に判断される者

社外取締役の神谷國廣氏は株式会社日立製作所の出身であり、当社と日立グループとの取引は僅少で、その他の利害関係もないため、独立した立場からの監視・監督という役割及び機能は十分に確保されていると考えております。監査等委員である社外取締役の中島馨氏は株式会社高島屋の社外取締役であります。当社と株式会社高島屋との取引は僅少であり、その他の利害関係はないため、独立した立場からの監査・監督という役割及び機能は十分に確保されていると考えております。また、監査等委員である社外取締役の藤野英男氏は、株式会社三菱UFJ銀行の出身であります。退職後10年を経過しております。従って、独立した立場からの監査・監督という役割及び機能は十分に確保されていると考えております。

当社は、上記の理由により、社外取締役神谷國廣、監査等委員である社外取締役中島馨、藤野英男の3氏を株式会社東京証券取引所の定めに基づく独立性基準に加えて、当社独自の独立性基準を満たすことから、独立役員として指定し、同取引所に届け出ております。

また、社外取締役の作尾徹也氏、佐藤徹氏は、2018年5月8日付で資本業務提携契約を締結し、当社株式の発行済株式数に対する割合19.23%を所有しているミサワホーム株式会社から就任しており、独立性基準は満たさないものと考えております。

③ 社外取締役による監督又は監査と内部監査、監査等委員会監査及び会計監査との相互連携並びに内部統制部門との関係

当社は、3名で構成する監査等委員会で経営監視に努めております。当社における内部監査については、内部監査部門に担当取締役と使用人を配置しており、その使用人の中から監査等委員会スタッフ2名を任命し、監査等委員会と内部監査部門は、適宜連携して内部統制のチェックを推進しております。また、内部監査部門は、全て監査等委員会へ内部監査の結果について報告を行い、監査等委員会の助言に基づき内部統制の機能強化を図っております。監査等委員会は定期的に、また必要に応じて、会計監査人から報告及び説明を受けております。

(3) 【監査の状況】

① 監査等委員会監査の状況

監査等委員会は、社外取締役2名を含む監査等委員3名によって構成されており、定期的開催し、また監査等委員は、原則として取締役会及び監査等委員会に全員が出席し、取締役の職務執行に関して、適法性、妥当性等の観点から業務監査を実施しております。監査等委員の過半数は社外取締役で構成されており、中立で幅広い視点からの経営監視機能を確保しております。

② 内部監査の状況

当社における内部監査については、内部監査部門に担当取締役と使用人を配置しており、その使用人の中から監査等委員会スタッフ2名を任命し、監査等委員会と内部監査部門は、適宜連携して内部統制のチェックを推進しております。また、内部監査部門は、全て監査等委員会へ内部監査の結果について報告を行い、監査等委員会の助言に基づき内部統制の機能強化を図っております。

③ 会計監査の状況

a. 監査法人の名称

太陽有限責任監査法人

b. 業務を執行した公認会計士

森内 茂之氏

土居 一彦氏

継続関与年数については、両氏とも7年以内であるため、記載を省略しております。

c. 監査業務に係る補助者の構成

当社の会計監査業務に係る補助者は、16名（公認会計士9名、その他7名）で構成されております。

d. 監査法人の選定方針と理由

監査法人の選定は、当社の「会計監査人（監査法人）の評価及び選定基準」に抵触しないことを方針としており、監査法人の概要、欠格事項の有無、監査の品質、独立性及び監査の実施体制、監査報酬の相当性等の観点から検証し、総合的に判断しております。

e. 監査等委員及び監査等委員会による監査法人の評価

監査法人の評価は、当社の「会計監査人（監査法人）の評価及び選定基準」に沿って毎期行っており、監査の品質、監査実施方法及び実施内容、監査報酬、経営者等とのコミュニケーション、監査等委員及び監査等委員会とのコミュニケーション・連携、不正リスク対応、独立性等について検証し、多面的に評価を行った結果、監査が適切に行われていることを確認しております。

④ 監査報酬の内容等

「企業内容等の開示に関する内閣府令の一部を改正する内閣府令」（平成31年1月31日内閣府令第3号）による改正後の「企業内容等の開示に関する内閣府令」第二号様式記載上の注意(56) d (f) i から iii の規定に経過措置を適用しております。

a. 監査公認会計士等に対する報酬

(単位：百万円)

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬	非監査業務に基づく報酬	監査証明業務に基づく報酬	非監査業務に基づく報酬
提出会社	33	—	29	—
連結子会社	—	—	—	—
計	33	—	29	—

b. その他重要な報酬の内容

該当事項はありません。

c. 監査報酬の決定方針

該当事項はありません。

d. 監査等委員会が会計監査人の報酬等に同意した理由

監査等委員会は、監査計画に対する監査実績等の検証を総合的に行い、監査報酬見積りの算出根拠の妥当性について監査日数、監査内容、監査に関わる人数等を総合的に検討した結果、会計監査人の報酬等について同意をしております。

(4) 【役員報酬等】

①役員報酬の額又はその算定方法の決定に関する方針に係る事項

取締役の報酬額につきましては、企業業績に鑑み決定しており、2016年6月24日開催の第70回定時株主総会で、取締役（監査等委員である取締役を除く。）の報酬限度額は年額240百万円以内（うち社外取締役分は年額20百万円以内）、監査等委員である取締役の報酬限度額は年額48百万円以内と決議しております。

取締役（監査等委員である取締役を除く。）の報酬につきましては、2017年3月期より中長期的な業績の向上と企業価値の増大に対する業務執行取締役の貢献意欲を高めることを目的に、従来の役員報酬の7割を固定報酬（定期同額給与）とし、3割を変動報酬（利益連動給与）とする業績連動型の報酬制度を導入しております。

このうち、固定報酬については、独立社外取締役を委員長とする報酬諮問委員会（代表取締役1名と独立社外取締役3名で構成）にて、各取締役の業績評価を行い、その答申をもとに取締役会で報酬額を決定することとしております。なお、2019年7月より、直近2年間の連結営業利益の平均額が20億円以上の場合は、役位ごとに固定報酬を増額しております。

また、変動報酬については、連結営業利益額の実績に基づく算定式によって計算し、報酬諮問委員会で審議・検討のうえ、取締役会で決定しております。支給対象、支給条件、計算方法は次の(1)～(5)のとおりであります。

報酬諮問委員会は、取締役の報酬について、その決定プロセスの透明性、客観性を確保してコーポレート・ガバナンスの強化を図るために設置しております。委員会活動は、固定・業績連動報酬の審議と取締役会への答申と、報酬規程の見直しについて報酬サーベイなどの情報を基にした報酬平均との比較・妥当性などの検証を行って審議・検討を行ったうえで取締役会において決定をしております。2019年3月期では報酬諮問委員会は5回開催しております。

(1) 変動報酬の支給対象

変動報酬の支給対象となる取締役は、法人税法第34条第1項第3号に規定される業務執行取締役であり、社外取締役は含みません。

(2) 変動報酬の支給条件

業務執行取締役に支給する変動報酬は、（ア）連結営業利益が5億円以上かつ、（イ）配当を行った場合のみ、これを支給いたします。

(3) 変動報酬の計算方法

業務執行取締役に支給する変動報酬は、以下のとおり、取締役の役位に応じて定められた係数をもとに計算しております。法人税法第34条第1項第3号イに規定する「当該事業年度の利益に関する指標」については、当該事業年度の連結営業利益としております。

変動報酬の算定式

連結営業利益 × 0.36% × 各業務執行取締役の役位別係数
(ただし、千円未満を切捨てとします。)

業務執行取締役の役位別係数及び人数

役位	役位別係数	取締役の数（人）	役位別係数計
取締役会長	0.85	0	0.00
取締役社長	1.00	1	1.00
取締役執行役員副社長	0.80	0	0.00
取締役専務執行役員	0.75	1	0.75
取締役常務執行役員	0.70	2	1.40
取締役執行役員	0.65	2	1.30
支給対象となる取締役の総数		6	4.45

上記は、2019年6月25日現在における業務執行取締役の数で計算しております。

(4) 変動報酬の上限額

業務執行取締役に支給する変動報酬の額は、それぞれ取締役会長18,360千円、取締役社長21,600千円、取締役副社長執行役員17,280千円、取締役専務執行役員16,200千円、取締役常務執行役員15,120千円、取締役執行役員14,040千円を超えない金額とします。

なお、連結営業利益が60億円以上の場合は、連結営業利益を60億円として変動報酬を計算します。

(5) 留意事項

取締役の在籍期間が12ヶ月に満たない場合は、職務執行期間を満了した場合の変動報酬額を、在籍月数で按分計算した金額を支給するものとし、1ヶ月に満たない日数については、在籍日数で日割計算した金額を支給するものとします（ただし、千円未満を切捨てとします。）。

なお、期末後から定時株主総会（定時株主総会の日を含む）までの退任については、当該期間における変動報酬は支給いたしません。

監査等委員である取締役の各報酬額は、監査等委員の協議により決定しております。

② 役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (百万円)	報酬等の内訳（百万円）			対象となる 役員の員数 (人)
		固定報酬	業績連動報酬	退職慰労金	
取締役（監査等委員及び社外取締役を除く。）	118	67	50	—	5
取締役（監査等委員） （社外取締役を除く。）	14	14	—	—	1
社外役員	15	15	—	—	5

(注) 2019年3月期における連結営業利益3,899百万円を基礎として算出し実績として記載しております。

③ 報酬等の総額が1億円以上である者の報酬等の総額等

該当事項はありません。

④ 使用人兼務役員の使用人分給与のうち重要なもの

該当事項はありません。

(5) 【株式の保有状況】

① 投資株式の区分の基準及び考え方

当社は、企業の持続的発展のため、継続的な取引関係を維持・強化につながり、中長期的に企業価値の向上に資する優良得意先と判断し保有した株式を、純投資目的以外の目的である投資株式（政策保有株式）とし、それ以外を純投資目的である投資株式としております。純投資目的である投資株式は、保有しない方針です。

② 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

a. 保有方針及び保有の合理性を検証する方法並びに個別銘柄の保有の適否に関する取締役会等における検証の内容

当社は、企業の持続的発展のため、継続的な取引関係を維持・強化につながり、中長期的に企業価値の向上に資する優良得意先と判断した場合に限り、その企業の株式を保有しております。

純投資目的以外の目的である投資株式の保有の適切性、経済合理性は、取締役会にて個別銘柄毎に、取得価格に対する保有便益（受取配当金等）と当社資本コストとの関係性等を具体的に精査し、継続保有の有無を検証しております。

b. 銘柄数及び貸借対照表計上額

	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額 (百万円)
非上場株式	22	252
非上場株式以外の株式	4	1,317

(当事業年度において株式数が増加した銘柄)

該当事項はありません。

(当事業年度において株式数が減少した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の減少に係る売却 価額の合計額 (百万円)
非上場株式	2	18
非上場株式以外の株式	2	532

c. 特定投資株式及びみなし保有株式の銘柄ごとの株式数、貸借対照表計上額等に関する情報
特定投資株式

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の 保有の有無
	株式数 (株)	株式数 (株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
双日(株)	2,411,116	2,411,116	(保有目的) 取引関係の維持強化 (定量的な保有効果) (注) 2	有
	940	822		
セイノーホールディングス(株)	183,895	183,895	(保有目的) 取引関係の維持強化 (定量的な保有効果) (注) 2	無
	271	360		
(株)大京	—	149,999	(保有目的) 取引関係の維持強化	有
	—	322		
東洋建設(株)	200,000	200,000	(保有目的) 取引関係の維持強化 (定量的な保有効果) (注) 2	有
	85	98		
岡藤ホールディングス(株)	—	289,200	(保有目的) 取引関係の維持強化	無
	—	52		
トモニホールディングス(株)	47,765	47,765	(保有目的) 取引関係の維持強化 (定量的な保有効果) (注) 2	無
	20	22		

(注) 1. 「—」は、当該銘柄を保有していないことを示しております。

2. 当社は、特定投資株式における定量的な保有効果の記載が困難であるため、保有の合理性を検証した方法について記載いたします。当社は毎期、保有の適切性、経済合理性は、取締役会にて個別銘柄毎に、取得価格に対する保有便益（受取配当金等）と当社資本コストとの関係性等を具体的に精査し、継続保有の有無を検証しております。

第5【経理の状況】

1. 連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

(1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和51年大蔵省令第28号）に準拠して作成し、「建設業法施行規則」（昭和24年建設省令第14号）に準じて記載しております。

(2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和38年大蔵省令第59号）第2条の規定に基づき、同規則及び「建設業法施行規則」（昭和24年建設省令第14号）により作成しております。

2. 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度（2018年4月1日から2019年3月31日まで）の連結財務諸表及び事業年度（2018年4月1日から2019年3月31日まで）の財務諸表について、太陽有限責任監査法人による監査を受けております。

3. 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握し、会計基準等の変更についての的確に対応することができる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入し、開示書類作成等のセミナーに定期的に参加しております。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

① 【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金預金	※2 8,117	※2 13,786
受取手形・完成工事未収入金等	※2, ※5 22,977	※5 23,478
電子記録債権	※5 551	124
販売用不動産	509	509
未成工事支出金	570	568
その他	335	302
貸倒引当金	△4	△11
流動資産合計	33,059	38,757
固定資産		
有形固定資産		
建物・構築物	※2 1,074	※2 1,078
機械、運搬具及び工具器具備品	499	491
土地	※2 952	※2 952
減価償却累計額	※3 △884	※3 △901
有形固定資産合計	1,642	1,620
無形固定資産	226	192
投資その他の資産		
投資有価証券	※1, ※2 2,214	※1 1,834
長期貸付金	22	22
繰延税金資産	634	699
その他	300	495
貸倒引当金	△1	△0
投資その他の資産合計	3,170	3,051
固定資産合計	5,040	4,864
資産合計	38,099	43,622
負債の部		
流動負債		
支払手形・工事未払金等	※5 9,573	※5 9,464
電子記録債務	※5 6,339	※5 10,081
短期借入金	※2, ※6 500	※2, ※6 300
1年内返済予定の長期借入金	※2 456	※2 297
1年内償還予定の社債	20	20
未払法人税等	579	1,027
未成工事受入金	1,953	1,370
完成工事補償引当金	404	473
賞与引当金	197	205
その他	1,245	1,137
流動負債合計	21,269	24,377
固定負債		
社債	50	30
長期借入金	※2 840	※2 643
退職給付に係る負債	2,062	2,127
環境対策引当金	4	—
その他	18	22
固定負債合計	2,976	2,822
負債合計	24,245	27,200

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
純資産の部		
株主資本		
資本金	4,324	4,324
利益剰余金	9,329	11,935
自己株式	△139	△142
株主資本合計	13,514	16,117
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	531	439
退職給付に係る調整累計額	△192	△135
その他の包括利益累計額合計	339	303
純資産合計	13,853	16,421
負債純資産合計	38,099	43,622

②【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
売上高		
完成工事高	51,973	64,012
不動産事業等売上高	899	851
売上高合計	52,872	64,864
売上原価		
完成工事原価	46,985	※1 57,650
不動産事業等売上原価	612	684
売上原価合計	47,598	58,335
売上総利益		
完成工事総利益	4,987	6,362
不動産事業等総利益	286	166
売上総利益合計	5,274	6,528
販売費及び一般管理費	※2, ※3 2,672	※2, ※3 2,629
営業利益	2,601	3,899
営業外収益		
受取利息	51	28
受取配当金	41	52
その他	27	8
営業外収益合計	120	90
営業外費用		
支払利息	19	11
支払手数料	66	91
その他	5	4
営業外費用合計	91	108
経常利益	2,629	3,882
特別利益		
固定資産売却益	※4 1	—
投資有価証券売却益	—	294
負ののれん発生益	2	—
その他	0	—
特別利益合計	4	294
特別損失		
固定資産除却損	※5 0	—
特別損失合計	0	—
税金等調整前当期純利益	2,633	4,177
法人税、住民税及び事業税	874	1,412
法人税等調整額	△89	△50
法人税等合計	785	1,361
当期純利益	1,848	2,815
非支配株主に帰属する当期純利益	—	—
親会社株主に帰属する当期純利益	1,848	2,815

【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
当期純利益	1,848	2,815
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	196	△92
退職給付に係る調整額	33	57
その他の包括利益合計	*1 229	*1 △35
包括利益	2,078	2,780
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	2,078	2,780
非支配株主に係る包括利益	—	—

③【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	4,324	—	7,585	△136	11,773
当期変動額					
剰余金の配当			△104		△104
親会社株主に帰属する当期純利益			1,848		1,848
自己株式の取得				△3	△3
自己株式の処分				0	0
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	—	—	1,744	△2	1,741
当期末残高	4,324	—	9,329	△139	13,514

	その他の包括利益累計額			純資産合計
	その他有価証券評価差額金	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計	
当期首残高	335	△225	109	11,882
当期変動額				
剰余金の配当				△104
親会社株主に帰属する当期純利益				1,848
自己株式の取得				△3
自己株式の処分				0
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	196	33	229	229
当期変動額合計	196	33	229	1,971
当期末残高	531	△192	339	13,853

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	4,324	—	9,329	△139	13,514
当期変動額					
剰余金の配当			△208		△208
親会社株主に帰属する当期純利益			2,815		2,815
自己株式の取得				△3	△3
自己株式の処分					—
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	—	—	2,606	△3	2,603
当期末残高	4,324	—	11,935	△142	16,117

	その他の包括利益累計額			純資産合計
	その他有価証券評価差額金	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計	
当期首残高	531	△192	339	13,853
当期変動額				
剰余金の配当				△208
親会社株主に帰属する当期純利益				2,815
自己株式の取得				△3
自己株式の処分				—
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	△92	57	△35	△35
当期変動額合計	△92	57	△35	2,568
当期末残高	439	△135	303	16,421

④【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	2,633	4,177
減価償却費	92	97
貸倒引当金の増減額 (△は減少)	△2	6
退職給付に係る負債の増減額 (△は減少)	107	118
賞与引当金の増減額 (△は減少)	8	8
受取利息及び受取配当金	△93	△81
支払利息	19	11
売上債権の増減額 (△は増加)	6,941	△73
未成工事支出金の増減額 (△は増加)	42	2
販売用不動産の増減額 (△は増加)	0	0
仕入債務の増減額 (△は減少)	△1,678	3,632
未成工事受入金の増減額 (△は減少)	1,396	△583
預り金の増減額 (△は減少)	42	△37
その他	102	△396
小計	9,613	6,882
利息及び配当金の受取額	92	81
利息の支払額	△17	△11
法人税等の支払額	△678	△984
営業活動によるキャッシュ・フロー	9,010	5,968
投資活動によるキャッシュ・フロー		
有形固定資産の取得による支出	△22	△14
無形固定資産の取得による支出	△103	△30
投資有価証券の取得による支出	△218	△7
投資有価証券の売却による収入	10	550
貸付けによる支出	—	△3
貸付金の回収による収入	3	4
敷金及び保証金の差入による支出	△21	△10
敷金及び保証金の回収による収入	14	7
定期預金の預入による支出	△234	△461
定期預金の払戻による収入	7	434
その他	11	△2
投資活動によるキャッシュ・フロー	△554	463
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入金の純増減額 (△は減少)	△3,654	△200
長期借入れによる収入	395	100
長期借入金の返済による支出	△381	△456
配当金の支払額	△114	△206
その他	△26	△27
財務活動によるキャッシュ・フロー	△3,782	△790
現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	4,674	5,641
現金及び現金同等物の期首残高	3,209	7,883
現金及び現金同等物の期末残高	※1 7,883	※1 13,524

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1. 連結の範囲に関する事項

連結子会社数 2社

連結子会社名

大末テクノサービス㈱

やすらぎ㈱

2. 持分法の適用に関する事項

持分法非適用の非連結子会社名及び関連会社名

①非連結子会社名

該当事項はありません。

②関連会社名

金岡単身寮PFI㈱

上記の持分法非適用の関連会社は、当期純損益（持分に見合う額）及び利益剰余金（持分に見合う額）等から見て、持分法の対象から除いても連結財務諸表に及ぼす影響が軽微であり、かつ全体としても重要性がないため、持分法の適用範囲から除外しております。

3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社の決算日は、すべて連結財務諸表提出会社と同じであります。

4. 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

①有価証券

その他有価証券

時価のあるもの

連結決算日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定）を採用しております。

時価のないもの

移動平均法による原価法を採用しております。

②たな卸資産

イ. 販売用不動産

個別法による原価法（貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定）を採用しております。

ロ. 未成工事支出金

個別法による原価法を採用しております。

ハ. 開発事業支出金

個別法による原価法（貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定）を採用しております。

ニ. 材料貯蔵品

先入先出法による原価法（貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定）を採用しております。

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

①有形固定資産（リース資産を除く）

定率法を採用しております。

ただし、1998年4月1日以降に取得した建物（建物附属設備を除く）並びに2016年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については、定額法によっております。

なお、主な耐用年数は以下のとおりであります。

建物・構築物	3年～50年
機械、運搬具及び工具器具備品	2年～20年

②無形固定資産（リース資産を除く）

定額法を採用しております。

なお、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間（5年）に基づいております。

③リース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

(3) 重要な引当金の計上基準

①貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。

②完成工事補償引当金

引渡しの終了した工事に対する瑕疵担保及びアフターサービス費に充てるため、瑕疵担保実績率に基づく金額及び特定の物件については補修費用の個別見積額を計上しております。

③賞与引当金

従業員の賞与の支給に充てるため、将来の支給見込額のうち当連結会計年度の負担額を計上しております。

④工事損失引当金

受注工事に係る将来の損失に備えるため、当連結会計年度末において見込まれる未引渡工事の損失発生見込額を計上しております。

(4) 退職給付に係る会計処理の方法

①退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

②数理計算上の差異の費用処理方法

数理計算上の差異については、発生の翌連結会計年度から、平均残存勤務期間以内の一定の年数である10年で定額法により費用処理しております。

(5) 重要な収益及び費用の計上基準

完成工事高及び完成工事原価の計上基準

当連結会計年度末までの進捗部分について成果の確実性が認められる工事については工事進行基準（工事の進捗率の見積りは原価比例法）を、その他の工事については工事完成基準を適用しております。

なお、工事進行基準による完成工事高は、60,747百万円であります。

(6) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりリスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

(7) その他連結財務諸表作成のための重要な事項

①消費税等の会計処理

税抜方式によっております。

②連結納税制度の適用

連結納税制度を適用しております。

(未適用の会計基準等)

- ・「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 平成30年3月30日 企業会計基準委員会)
- ・「収益認識に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第30号 平成30年3月30日 企業会計基準委員会)

(1) 概要

国際会計基準審議会 (IASB) 及び米国財務会計基準審議会 (FASB) は、共同して収益認識に関する包括的な会計基準の開発を行い、2014年5月に「顧客との契約から生じる収益」(IASBにおいてはIFRS第15号、FASBにおいてはTopic606)を公表しており、IFRS第15号は2018年1月1日以後開始する事業年度から、Topic606は2017年12月15日より後に開始する事業年度から適用される状況を踏まえ、企業会計基準委員会において、収益認識に関する包括的な会計基準が開発され、適用指針と合わせて公表されたものです。

企業会計基準委員会の収益認識に関する会計基準の開発にあたっての基本的な方針として、IFRS第15号と整合性を図る便益の1つである財務諸表間の比較可能性の観点から、IFRS第15号の基本的な原則を取り入れることを出発点とし、会計基準を定めることとされ、また、これまで我が国で行われてきた実務等に配慮すべき項目がある場合には、比較可能性を損なわない範囲で代替的な取扱いを追加することとされております。

(2) 適用予定日

2022年3月期の期首から適用します。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

「収益認識に関する会計基準」等の適用による連結財務諸表に与える影響額については、現時点で評価中であり、ます。

(表示方法の変更)

(「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」の適用に伴う変更)

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 平成30年2月16日。以下「税効果会計基準一部改正」という。)を当連結会計年度の期首から適用し、繰延税金資産は投資その他の資産の区分に表示する方法に変更するとともに、税効果会計関係注記を変更しております。

この結果、前連結会計年度の連結貸借対照表において、「流動資産」の「繰延税金資産」225百万円は、「投資その他の資産」の「繰延税金資産」634百万円に含めて表示しております。

また、税効果会計関係注記において、税効果会計基準一部改正第3項から第5項に定める「税効果会計に係る会計基準」注解(注8)(評価性引当額の合計額を除く。)に記載された内容を追加しております。

(連結貸借対照表関係)

※1. 非連結子会社及び関連会社に対するものは、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
投資有価証券(株式)	4百万円	4百万円

※2. 担保資産及び担保付債務

担保に供している資産は、次のとおりであります。なお、投資有価証券のうち前連結会計年度末29百万円、当連結会計年度末28百万円は、営業保証金として差し入れております。

下記の他、工事請負代金の債権譲渡担保差入証書等を差し入れており、これに対応する工事請負代金総額(既入金額を除く)は、前連結会計年度末1,078百万円、当連結会計年度末558百万円であります。また、預金については前連結会計年度74百万円、当連結会計年度101百万円を公共工事履行保証保険等の担保に供しております。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
受取手形	1,479百万円	—百万円
建物	541	524
土地	807	807
投資有価証券	1,491	—
計	4,319	1,331

担保付債務は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
短期借入金	100百万円	100百万円
1年内返済予定の長期借入金	71	71
長期借入金	321	250

※3. 減価償却累計額には減損損失累計額が含まれております。

4. 保証債務

連結会社以外の会社が顧客からの前受金について、信用保証会社から保証を受けており、この前受金保証について連結会社が信用保証会社に対して保証を行っております。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	和田興産(株)他2社	当連結会計年度 (2019年3月31日)	和田興産(株)他2社
和田興産(株)他2社	1,292百万円		1,611百万円	

※5. 連結会計年度末日満期手形等

連結会計年度末日満期手形等の会計処理については、手形交換日又は決済日をもって決済処理をしております。なお、当連結会計年度の末日が金融機関の休日であったため、次の連結会計年度末日満期手形等が連結会計年度末残高に含まれております。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
受取手形	127百万円	77百万円
支払手形	486	520
電子記録債権	13	—
電子記録債務	1,173	2,177

※6. コミットメントライン契約

当社においては、資金調達の機動性を確保するため、株式会社三菱UFJ銀行とコミットメントライン契約を締結しております。この契約に基づく借入未実行残高は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
コミットメントライン契約の総額	7,000百万円	7,000百万円
借入実行残高	100	100
差引額	6,900	6,900

(連結損益計算書関係)

※1. 完成工事原価に含まれている工事損失引当金繰入額は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
	－百万円	15百万円

※2. 販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
従業員給料手当	978百万円	924百万円
賞与引当金繰入額	62	68
退職給付費用	94	88
貸倒引当金繰入額	△2	6
地代家賃	242	248

※3. 一般管理費に含まれる研究開発費の総額

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
	49百万円	47百万円

※4. 固定資産売却益の内容は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
土地	1百万円	－百万円
計	1	－

※5. 固定資産除却損の内容は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
その他(備品等)	0百万円	－百万円
計	0	－

(連結包括利益計算書関係)

※1. その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
その他有価証券評価差額金：		
当期発生額	285百万円	162百万円
組替調整額	－	△294
税効果調整前	285	△132
税効果額	△89	39
その他有価証券評価差額金	196	△92
退職給付に係る調整額：		
当期発生額	△31	16
組替調整額	79	66
税効果調整前	48	82
税効果額	△14	△25
退職給付に係る調整額	33	57
その他の包括利益合計	229	△35

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

(単位:千株)

	当連結会計年度期首 株式数	当連結会計年度 増加株式数	当連結会計年度 減少株式数	当連結会計年度末 株式数
発行済株式				
普通株式	10,614	—	—	10,614
合計	10,614	—	—	10,614
自己株式				
普通株式(注) 1, 2	166	2	0	169
合計	166	2	0	169

(注) 1. 普通株式の自己株式の株式数の増加2,973株は、単元未満株式の買取りによる増加であります。

2. 普通株式の自己株式の株式数の減少149株は、単元未満株式の売渡しによる減少であります。

2. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2017年5月10日 取締役会	普通株式	104	10	2017年3月31日	2017年6月12日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2018年5月14日 取締役会	普通株式	208	利益剰余金	20	2018年3月31日	2018年6月11日

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

（単位：千株）

	当連結会計年度期首 株式数	当連結会計年度 増加株式数	当連結会計年度 減少株式数	当連結会計年度末 株式数
発行済株式				
普通株式	10,614	—	—	10,614
合計	10,614	—	—	10,614
自己株式				
普通株式（注）	169	2	—	171
合計	169	2	—	171

（注）普通株式の自己株式の株式数の増加2,592株は、単元未満株式の買取りによる増加であります。

2. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 （百万円）	1株当たり 配当額（円）	基準日	効力発生日
2018年5月14日 取締役会	普通株式	208	20	2018年3月31日	2018年6月11日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当金の総額 （百万円）	配当の原資	1株当たり 配当額（円）	基準日	効力発生日
2019年5月22日 取締役会	普通株式	208	利益剰余金	20	2019年3月31日	2019年6月10日

（連結キャッシュ・フロー計算書関係）

※1. 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 （自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）	当連結会計年度 （自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）
現金及び預金勘定	8,117百万円	13,786百万円
預入期間が3ヶ月を超える定期預金	△234	△261
現金及び現金同等物	7,883	13,524

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループは、資金運用については短期的な預金等に限定し、銀行等金融機関からの借入により資金を調達しております。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク並びにリスク管理体制

営業債権である受取手形・完成工事未収入金等及び電子記録債権は、顧客の信用リスクに晒されています。当該リスクに関しては、当社グループのリスク管理基本規程に従い、取引先ごとの期日管理及び残高管理を行うとともに、主な取引先の信用状況を半期ごとに把握する体制としております。

投資有価証券である株式は、市場価格の変動リスクに晒されていますが、主に業務上の関係を有する企業の株式であり、上場株式については四半期ごとに時価の把握を行っております。

営業債務である支払手形・工事未払金等及び電子記録債務は、1年以内の支払期日であります。

借入金の用途は運転資金（主として短期）であります。変動金利の借入金は金利の変動リスクに晒されていますが、そのほとんどが短期借入金でありリスクは僅少であります。

また、営業債務や借入金は、流動性リスクに晒されていますが、当社グループでは、月次に資金繰計画を作成・更新するとともに、手許流動性の維持などにより流動性リスクを管理しております。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは含まれておりません（注）2 参照）。

前連結会計年度（2018年3月31日）

(単位：百万円)

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
(1) 現金預金	8,117	8,117	—
(2) 受取手形・完成工事未収入金等	22,977	22,978	1
(3) 電子記録債権	551	551	—
(4) 投資有価証券	1,943	1,943	—
資産計	33,590	33,591	1
(1) 支払手形・工事未払金等	9,573	9,573	—
(2) 電子記録債務	6,339	6,339	—
(3) 短期借入金	500	500	—
(4) 長期借入金（1年内返済予定の長期借入金を含む）	1,297	1,296	△0
負債計	17,710	17,709	△0

当連結会計年度（2019年3月31日）

(単位：百万円)

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
(1) 現金預金	13,786	13,786	—
(2) 受取手形・完成工事未収入金等	23,478	23,479	0
(3) 電子記録債権	124	124	—
(4) 投資有価証券	1,581	1,581	—
資産計	38,971	38,972	0
(1) 支払手形・工事未払金等	9,464	9,464	—
(2) 電子記録債務	10,081	10,081	—
(3) 短期借入金	300	300	—
(4) 長期借入金（1年内返済予定の長期借入金を含む）	940	941	0
負債計	20,786	20,786	0

(注) 1. 金融商品の時価の算定方法並びに有価証券に関する事項

資 産

(1) 現金預金

これらは短期間で決済されるものであるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(2) 受取手形・完成工事未収入金等、(3) 電子記録債権

これらの時価は、一定の期間ごとに区分した債権ごとに債権額を満期までの期間及び信用リスクを加味した利率により割り引いた現在価値によっております。

(4) 投資有価証券

これらの時価について、株式等は取引所の価格によっており、債券は取引所の価格又は取引金融機関等から提示された価格によっております。

また、保有目的ごとの有価証券に関する事項については、注記事項「有価証券関係」をご参照下さい。

負 債

(1) 支払手形・工事未払金等、(2) 電子記録債務、(3) 短期借入金

これらは短期間で決済されるものであるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(4) 長期借入金（1年内返済予定の長期借入金を含む）

長期借入金のうち変動金利によるものは、短期間で市場金利を反映し、時価は帳簿価額に近似していることから、当該帳簿価額によっております。固定金利によるものは、一定期間ごとに区分した当該長期借入金の元利金の合計額を、同様の借入において想定される利率で割り引いて現在価値を算出しております。

2. 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品

(単位：百万円)

区分	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
非上場株式	271	252

これらについては、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、「投資有価証券」には含めておりません。

3. 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額

前連結会計年度（2018年3月31日）

(単位：百万円)

	1年以内	1年超 5年以内	5年超 10年以内	10年超
現金預金	8,117	—	—	—
受取手形・完成工事未収入金等	22,414	563	—	—
電子記録債権	551	—	—	—
投資有価証券				
その他有価証券のうち満期があるもの				
国債・地方債等	—	5	23	203
合計	31,083	568	23	203

当連結会計年度（2019年3月31日）

（単位：百万円）

	1年以内	1年超 5年以内	5年超 10年以内	10年超
現金預金	13,786	—	—	—
受取手形・完成工事未収入金等	23,105	373	—	—
電子記録債権	124	—	—	—
投資有価証券 その他有価証券のうち満期があるもの 国債・地方債等	—	28	—	202
合計	37,016	402	—	202

4. 借入金の連結決算日後の返済予定額

前連結会計年度（2018年3月31日）

（単位：百万円）

	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超
短期借入金	500	—	—	—	—	—
長期借入金（1年内返済予定の長期借入金を含む）	456	264	228	185	126	35
合計	956	264	228	185	126	35

当連結会計年度（2019年3月31日）

（単位：百万円）

	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超
短期借入金	300	—	—	—	—	—
長期借入金（1年内返済予定の長期借入金を含む）	297	261	218	126	35	—
合計	597	261	218	126	35	—

(有価証券関係)

1. その他有価証券

前連結会計年度 (2018年3月31日)

(単位: 百万円)

	種類	連結貸借対照表計上額	取得原価	差額
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	(1) 株式	1,658	880	777
	(2) 債券			
	① 国債・地方債等	29	27	1
	② 社債	—	—	—
	③ その他	—	—	—
	(3) その他	—	—	—
	小計	1,687	908	778
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	(1) 株式	52	62	△9
	(2) 債券			
	① 国債・地方債等	203	208	△5
	② 社債	—	—	—
	③ その他	—	—	—
	(3) その他	—	—	—
	小計	256	271	△15
合計		1,943	1,180	763

(注) 非上場株式 (連結貸借対照表計上額271百万円) については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

当連結会計年度 (2019年3月31日)

(単位: 百万円)

	種類	連結貸借対照表計上額	取得原価	差額
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	(1) 株式	1,350	714	636
	(2) 債券			
	① 国債・地方債等	28	27	1
	② 社債	—	—	—
	③ その他	—	—	—
	(3) その他	—	—	—
	小計	1,379	741	637
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	(1) 株式	—	—	—
	(2) 債券			
	① 国債・地方債等	202	208	△5
	② 社債	—	—	—
	③ その他	—	—	—
	(3) その他	—	—	—
	小計	202	208	△5
合計		1,581	950	631

(注) 非上場株式 (連結貸借対照表計上額252百万円) については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

2. 売却したその他有価証券

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

（単位：百万円）

種類	売却額	売却益の合計額	売却損の合計額
(1) 株式	—	—	—
(2) 債券			
① 国債・地方債等	10	—	—
② 社債	—	—	—
③ その他	—	—	—
(3) その他	—	—	—
合計	10	—	—

（注）上表の債券の「売却額」は、償還額であります。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

（単位：百万円）

種類	売却額	売却益の合計額	売却損の合計額
(1) 株式	550	294	0
(2) 債券			
① 国債・地方債等	—	—	—
② 社債	—	—	—
③ その他	—	—	—
(3) その他	—	—	—
合計	550	294	0

3. 減損処理を行った有価証券

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）及び当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）において、減損処理を行った有価証券はありません。

なお、減損処理にあたっては、期末における時価が取得原価に比べ50%以上下落した場合には全て減損処理を行い、30～50%程度下落した場合には、回復可能性等を考慮して必要と認められた額について減損処理を行っております。

（デリバティブ取引関係）

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）及び当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

当社グループは、デリバティブ取引を行っていないので、該当事項はありません。

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

当社については、退職一時金制度、確定拠出年金制度、前払退職金制度及び確定給付年金と確定拠出年金の特徴を併せ持つ混合型年金制度（キャッシュ・バランス・プラン）を設けております。

また、従業員の退職等に際して割増退職金を支払う場合があります。

連結子会社である大末テクノサービス(株)は、退職一時金制度を設けており、加えて確定拠出型年金である中小企業退職金共済制度に加入しております。

2. 確定給付制度

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
退職給付債務の期首残高	3,172百万円	3,252百万円
勤務費用	155	167
利息費用	13	12
数理計算上の差異の発生額	34	△20
退職給付の支払額	△125	△112
その他	2	0
退職給付債務の期末残高	3,252	3,298

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
年金資産の期首残高	1,177百万円	1,203百万円
期待運用収益	17	18
数理計算上の差異の発生額	3	△4
事業主からの拠出額	81	225
退職給付の支払額	△76	△64
年金資産の期末残高	1,203	1,378

(3) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
積立型制度の退職給付債務	1,190百万円	1,171百万円
年金資産	△1,203	△1,378
	△13	△206
非積立型制度の退職給付債務	2,062	2,127
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	2,048	1,920
退職給付に係る負債	2,062	2,127
退職給付に係る資産	△13	△206
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	2,048	1,920

(4) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
勤務費用	155百万円	167百万円
利息費用	13	12
期待運用収益	△17	△18
数理計算上の差異の費用処理額	79	66
確定給付制度に係る退職給付費用	231	227

(5) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
数理計算上の差異	48百万円	82百万円
合 計	48	82

(6) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
未認識数理計算上の差異	277百万円	194百万円
合 計	277	194

(7) 年金資産に関する事項

① 年金資産の主な内訳

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
債券	67%	68%
株式	15	14
その他	18	18
合 計	100	100

② 長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在及び将来期待される長期の収益率を考慮しております。

(8) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
割引率	0.38%	0.22%
長期期待運用収益率	1.50%	1.50%

3. 確定拠出制度

当社及び連結子会社の確定拠出制度への要拠出額は、前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）75百万円、当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）72百万円であります。

（ストック・オプション等関係）

該当事項はありません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
繰延税金資産		
退職給付に係る負債	629百万円	589百万円
貸倒引当金限度超過額	1	1
販売用不動産評価損	12	12
完成工事補償引当金	124	147
賞与引当金	60	63
その他	177	270
繰延税金資産小計	1,005	1,084
税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額	△17	△56
将来減算一時差異等の合計に係る評価性引当額	△112	△127
評価性引当額小計	△129	△183
繰延税金資産合計	875	900
繰延税金負債		
固定資産圧縮積立金	△9	△9
その他有価証券評価差額金	△231	△192
繰延税金負債合計	△241	△201
繰延税金資産（負債）の純額	634	699

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
法定実効税率	—	30.58%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	—	0.20
住民税均等割	—	0.89
評価性引当額の増加	—	0.64
その他	—	0.29
税効果会計適用後の法人税等の負担率	—	32.60

(注) 前連結会計年度は、法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間の差異が法定実効税率の100分の5以下であるため注記を省略しております。

(企業結合等関係)

該当事項はありません。

(賃貸等不動産関係)

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

賃貸等不動産の総額に重要性がないため省略しております。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

賃貸等不動産の総額に重要性がないため省略しております。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

当社グループは、建設事業並びにこれらの付帯業務を単一の報告セグメントとしており、その他の事業については重要性が乏しいため、記載を省略しております。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

当社グループは、建設事業並びにこれらの付帯業務を単一の報告セグメントとしており、その他の事業については重要性が乏しいため、記載を省略しております。

【関連情報】

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

1. 製品及びサービスごとの情報

単一の製品・サービスの区分の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

(単位：百万円)

顧客の名称又は氏名	売上高	関連するセグメント名
穴吹興産株式会社	6,754	建設事業

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

1. 製品及びサービスごとの情報

単一の製品・サービスの区分の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

該当事項はありません。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

当社グループは、建設事業並びにこれらの付帯業務を単一の報告セグメントとしており、その他の事業については重要性が乏しいため、記載を省略しております。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

当社グループは、建設事業並びにこれらの付帯業務を単一の報告セグメントとしており、その他の事業については重要性が乏しいため、記載を省略しております。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

該当事項はありません。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

重要性が乏しいため、記載を省略しております。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

関連当事者との取引

連結財務諸表提出会社と関連当事者との取引

(ア) 連結財務諸表提出会社の親会社及び主要株主（会社等の場合に限る。）等

重要性がないため記載していません。

(イ) 連結財務諸表提出会社の非連結子会社及び関連会社等

該当事項はありません。

(ウ) 連結財務諸表提出会社の役員及び主要株主（個人の場合に限る。）等

該当事項はありません。

(1株当たり情報)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
1株当たり純資産額	1,326.35円	1,572.61円
1株当たり当期純利益	176.96円	269.58円

(注) 1. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載していません。

2. 1株当たり当期純利益の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
親会社株主に帰属する当期純利益 (百万円)	1,848	2,815
普通株主に帰属しない金額 (百万円)	—	—
普通株式に係る親会社株主に帰属する 当期純利益 (百万円)	1,848	2,815
普通株式の期中平均株式数 (千株)	10,446	10,443

(重要な後発事象)
該当事項はありません。

⑤【連結附属明細表】

【社債明細表】

会社名	銘柄	発行年月日	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	利率 (%)	担保	償還期限
大末建設㈱	第1回無担保社債 (注) 1	年月日 2016. 9. 23	70 (20)	50 (20)	0.2	なし	年月日 2021. 9. 23
合計	—	—	70 (20)	50 (20)	—	—	—

(注) 1. () 内書は、1年以内の償還予定額であります。

2. 連結決算日後5年間の償還予定額は以下のとおりであります。

1年以内 (百万円)	1年超2年 以内 (百万円)	2年超3年 以内 (百万円)	3年超4年 以内 (百万円)	4年超5年 以内 (百万円)
20	20	10	—	—

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	500	300	1.13	—
1年以内に返済予定の長期借入金	456	297	0.94	—
1年以内に返済予定のリース債務	3	4	—	—
長期借入金（1年以内に返済予定のものを除く。）	840	643	1.01	2020年～2023年
リース債務（1年以内に返済予定のものを除く。）	3	7	—	2020年～2023年
その他有利子負債	—	—	—	—
合計	1,804	1,252	—	—

(注) 1. 平均利率については、期末借入金残高に対する加重平均利率を記載しております。

2. リース債務の平均利率については、リース料総額に含まれる利息相当額を控除する前の金額でリース債務を連結貸借対照表に計上しているため、記載しておりません。

3. 長期借入金及びリース債務（1年以内に返済予定のものを除く。）の連結決算日後5年間の返済予定額は以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	1年超2年以内	2年超3年以内	3年超4年以内	4年超5年以内
長期借入金	261	218	126	35
リース債務	3	1	1	0

【資産除去債務明細表】

該当事項はありません。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上高(百万円)	14,771	31,125	48,946	64,864
税金等調整前四半期(当期) 純利益(百万円)	701	1,746	3,347	4,177
親会社株主に帰属する 四半期(当期)純利益 (百万円)	464	1,170	2,264	2,815
1株当たり四半期(当期)純 利益(円)	44.45	112.10	216.79	269.58

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益 (円)	44.45	67.65	104.70	52.79

2 【財務諸表等】

(1) 【財務諸表】

① 【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金預金	※1 7,064	※1 12,494
受取手形	※1, ※3 2,615	※3 645
電子記録債権	※3 551	124
完成工事未収入金	20,120	22,584
販売用不動産	504	504
未成工事支出金	565	554
前払費用	94	69
その他	252	247
貸倒引当金	—	△7
流動資産合計	31,769	37,215
固定資産		
有形固定資産		
建物	784	788
減価償却累計額	△216	△237
建物（純額）	※1 567	※1 550
構築物	17	17
減価償却累計額	△13	△14
構築物（純額）	4	3
工具器具・備品	211	198
減価償却累計額	△173	△162
工具器具・備品（純額）	37	36
土地	※1 813	※1 813
リース資産	16	24
減価償却累計額	△9	△13
リース資産（純額）	6	10
有形固定資産合計	1,430	1,414
無形固定資産		
ソフトウェア	196	165
その他	21	21
無形固定資産合計	217	186
投資その他の資産		
投資有価証券	※1 2,177	1,797
関係会社株式	521	525
従業員に対する長期貸付金	22	22
前払年金費用	54	218
繰延税金資産	512	583
その他	256	255
投資その他の資産合計	3,545	3,402
固定資産合計	5,192	5,003
資産合計	36,962	42,219

(単位：百万円)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
負債の部		
流動負債		
支払手形	※3 2,553	※3 2,120
電子記録債務	※3 6,339	※3 10,081
工事未払金	6,874	7,058
短期借入金	※1,※4 500	※1,※4 300
1年内返済予定の長期借入金	※1 456	※1 297
1年内償還予定の社債	20	20
リース債務	3	4
未払法人税等	569	1,012
未払消費税等	173	101
未成工事受入金	1,947	1,346
預り金	613	583
完成工事補償引当金	382	413
賞与引当金	186	186
その他	393	395
流動負債合計	21,014	23,921
固定負債		
社債	50	30
長期借入金	※1 840	※1 643
リース債務	3	7
退職給付引当金	1,763	1,882
環境対策引当金	4	—
その他	4	4
固定負債合計	2,665	2,567
負債合計	23,680	26,489
純資産の部		
株主資本		
資本金	4,324	4,324
利益剰余金		
利益準備金	36	57
その他利益剰余金		
繰越利益剰余金	8,535	11,057
利益剰余金合計	8,572	11,115
自己株式	△139	△142
株主資本合計	12,757	15,297
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	524	433
評価・換算差額等合計	524	433
純資産合計	13,281	15,730
負債純資産合計	36,962	42,219

②【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
売上高		
完成工事高	50,614	62,680
不動産事業等売上高	—	—
売上高合計	50,614	62,680
売上原価		
完成工事原価	45,746	56,481
不動産事業等売上原価	0	0
売上原価合計	45,746	56,481
売上総利益		
完成工事総利益	4,868	6,199
不動産事業等総損失(△)	△0	△0
売上総利益合計	4,868	6,198
販売費及び一般管理費		
役員報酬	119	147
従業員給料手当	946	899
賞与引当金繰入額	55	55
退職給付費用	85	78
法定福利費	164	152
福利厚生費	65	48
修繕維持費	8	11
事務用品費	22	20
通信交通費	118	110
動力用水光熱費	28	28
広告宣伝費	6	6
貸倒引当金繰入額	—	7
貸倒損失	—	25
交際費	25	28
地代家賃	223	233
減価償却費	80	85
租税公課	109	135
保険料	14	12
支払手数料	176	183
雑費	86	75
販売費及び一般管理費合計	2,337	2,347
営業利益	2,530	3,851

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
営業外収益		
受取利息	51	28
受取配当金	40	52
受取地代家賃	32	32
その他	15	6
営業外収益合計	139	119
営業外費用		
支払利息	19	11
支払手数料	66	91
その他	26	25
営業外費用合計	112	128
経常利益	2,557	3,842
特別利益		
投資有価証券売却益	—	294
特別利益合計	—	294
特別損失		
固定資産除却損	※1 0	※1 0
投資有価証券評価損	—	45
特別損失合計	0	45
税引前当期純利益	2,557	4,091
法人税、住民税及び事業税	855	1,371
法人税等調整額	△74	△31
法人税等合計	780	1,340
当期純利益	1,776	2,751

【完成工事原価報告書】

		前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)		当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	
区分	注記 番号	金額 (百万円)	構成比 (%)	金額 (百万円)	構成比 (%)
材料費		4,845	10.6	6,790	12.0
労務費		10,013	21.9	11,724	20.8
(うち労務外注費)		(10,013)	(21.9)	(11,724)	(20.8)
外注費		25,222	55.1	31,915	56.5
経費		5,665	12.4	6,049	10.7
(うち人件費)		(3,258)	(7.1)	(3,184)	(5.6)
計		45,746	100.0	56,481	100.0

(注) 原価計算の方法は個別原価計算であります。

【不動産事業等売上原価報告書】

		前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)		当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	
区分	注記 番号	金額 (百万円)	構成比 (%)	金額 (百万円)	構成比 (%)
不動産売却原価		0	100.0	0	100.0
計		0	100.0	0	100.0

③【株主資本等変動計算書】

前事業年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本							株主資本合計
	資本金	資本剰余金		利益剰余金			自己株式	
		その他資本剰余金	資本剰余金合計	利益準備金	その他利益剰余金 繰越利益剰余金	利益剰余金合計		
当期首残高	4,324	—	—	26	6,874	6,900	△136	11,088
当期変動額								
利益準備金の積立				10	△10	—		—
剰余金の配当				—	△104	△104		△104
当期純利益					1,776	1,776		1,776
自己株式の取得							△3	△3
自己株式の処分							0	0
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）								
当期変動額合計	—	—	—	10	1,661	1,671	△2	1,668
当期末残高	4,324	—	—	36	8,535	8,572	△139	12,757

	評価・換算差額等		純資産合計
	その他有価証券評価差額金	評価・換算差額等合計	
当期首残高	328	328	11,417
当期変動額			
利益準備金の積立			—
剰余金の配当			△104
当期純利益			1,776
自己株式の取得			△3
自己株式の処分			0
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	195	195	195
当期変動額合計	195	195	1,864
当期末残高	524	524	13,281

当事業年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本							自己株式	株主資本合計
	資本金	資本剰余金		利益剰余金					
		その他資本剰余金	資本剰余金合計	利益準備金	その他利益剰余金 繰越利益剰余金	利益剰余金合計			
当期首残高	4,324	—	—	36	8,535	8,572	△139	12,757	
当期変動額									
利益準備金の積立				20	△20	—		—	
剰余金の配当				—	△208	△208		△208	
当期純利益					2,751	2,751		2,751	
自己株式の取得							△3	△3	
自己株式の処分							—	—	
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）									
当期変動額合計	—	—	—	20	2,521	2,542	△3	2,539	
当期末残高	4,324	—	—	57	11,057	11,115	△142	15,297	

	評価・換算差額等		純資産合計
	その他有価証券評価差額金	評価・換算差額等合計	
当期首残高	524	524	13,281
当期変動額			
利益準備金の積立			—
剰余金の配当			△208
当期純利益			2,751
自己株式の取得			△3
自己株式の処分			—
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	△91	△91	△91
当期変動額合計	△91	△91	2,448
当期末残高	433	433	15,730

【注記事項】

(重要な会計方針)

1. 有価証券の評価基準及び評価方法

- (1) 子会社株式及び関連会社株式
移動平均法による原価法を採用しております。
- (2) その他有価証券
時価のあるもの
決算日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定）を採用しております。
時価のないもの
移動平均法による原価法を採用しております。

2. たな卸資産の評価基準及び評価方法

- (1) 販売用不動産
個別法による原価法（貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定）を採用しております。
- (2) 未成工事支出金
個別法による原価法を採用しております。
- (3) 開発事業支出金
個別法による原価法（貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定）を採用しております。
- (4) 材料貯蔵品
先入先出法による原価法（貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定）を採用しております。

3. 固定資産の減価償却の方法

- (1) 有形固定資産（リース資産を除く）
定率法を採用しております。
ただし、1998年4月1日以降に取得した建物（建物附属設備を除く）並びに2016年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については、定額法によっております。
なお、主な耐用年数は以下のとおりであります。

建物	3年～50年
構築物	15年～30年
工具器具・備品	2年～20年
- (2) 無形固定資産（リース資産を除く）
定額法を採用しております。
なお、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間（5年）に基づいております。
- (3) リース資産
リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

4. 引当金の計上基準

- (1) 貸倒引当金
債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。
- (2) 完成工事補償引当金
引渡しの終了した工事に対する瑕疵担保及びアフターサービス費に充てるため、瑕疵担保実績率に基づく金額及び特定の物件については補修費用の個別見積額を計上しております。
- (3) 賞与引当金
従業員の賞与の支給に充てるため、将来の支給見込額のうち当事業年度の負担額を計上しております。
- (4) 工事損失引当金
受注工事に係る将来の損失に備えるため、当事業年度末において見込まれる未引渡工事の損失発生見込額を計上しております。

(5) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき計上しております。

退職給付引当金及び退職給付費用の処理方法は、以下のとおりです。

①退職給付見込額の期間帰属の方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

②数理計算上の差異の費用処理方法

発生翌事業年度から、平均残存勤務期間以内の一定の年数である10年で定額法により費用処理しております。

5. 収益及び費用の計上基準

完成工事高及び完成工事原価の計上基準

当事業年度末までの進捗部分について成果の確実性が認められる工事については工事進行基準（工事の進捗率の見積りは原価比例法）を、その他の工事については工事完成基準を適用しております。

なお、工事進行基準による完成工事高は、60,131百万円であります。

6. その他財務諸表作成のための重要な事項

(1) 消費税等の会計処理

税抜方式によっております。

(2) 連結納税制度の適用

連結納税制度を適用しております。

(3) 退職給付に係る会計処理

未認識数理計算上の差異の会計処理の方法は、連結財務諸表における会計処理方法と異なっております。

（表示方法の変更）

（「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」の適用に伴う変更）

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」（企業会計基準第28号 平成30年2月16日。以下「税効果会計基準一部改正」という。）を当事業年度の期首から適用し、繰延税金資産は投資その他の資産の区分に表示する方法に変更しております。

この結果、前事業年度の貸借対照表において、「流動資産」の「繰延税金資産」217百万円は、「投資その他の資産」の「繰延税金資産」512百万円に含めて表示しております。

また、税効果会計関係注記において、税効果会計基準一部改正第4項に定める「税効果会計に係る会計基準」注解（注8）(1)（評価性引当額の合計額を除く。）に記載された内容を追加しております。

(貸借対照表関係)

※1. 担保資産及び担保付債務

担保に供している資産は、次のとおりであります。なお、投資有価証券のうち前事業年度末29百万円、当事業年度末28百万円は、営業保証金として差し入れております。

下記の他、工事請負代金の債権譲渡担保差入証書等を差し入れており、これに対応する工事請負代金総額（既入金額を除く）は、前事業年度末1,078百万円、当事業年度末558百万円であります。また、現金預金については前事業年度74百万円、当事業年度101百万円を公共工事履行保証保険等の担保に供しております。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
受取手形	1,479百万円	—百万円
建物	541	524
土地	807	807
投資有価証券	1,491	—
計	4,319	1,331

担保付債務は、次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
短期借入金	100百万円	100百万円
1年内返済予定の長期借入金	71	71
長期借入金	321	250

2. 保証債務

下記の会社が顧客からの前受金について、信用保証会社から保証を受けており、この前受金保証について当社が信用保証会社に対して保証を行っております。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
和田興産(株)他2社	1,292百万円	和田興産(株)他2社 1,611百万円

※3. 事業年度末日満期手形等

事業年度末日満期手形等の会計処理については、手形交換日又は決済日をもって決済処理をしております。

なお、当事業年度の末日が金融機関の休日であったため、次の事業年度末日満期手形等が事業年度末残高に含まれております。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
受取手形	127百万円	77百万円
支払手形	486	520
電子記録債権	13	—
電子記録債務	1,173	2,177

※4. コミットメントライン契約

当社においては、資金調達の機動性を確保するため、株式会社三菱UFJ銀行とコミットメントライン契約を締結しております。この契約に基づく借入未実行残高は次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
コミットメントライン契約の総額	7,000百万円	7,000百万円
借入実行残高	100	100
差引額	6,900	6,900

(損益計算書関係)

※1. 固定資産除却損の内容は、次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
その他(備品等)	0百万円	0百万円

(有価証券関係)

子会社株式及び関連会社株式(当事業年度の貸借対照表計上額は子会社株式521百万円、関連会社株式4百万円、前事業年度の貸借対照表計上額は子会社株式517百万円、関連会社株式4百万円)は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、記載しておりません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
繰延税金資産		
退職給付引当金	522百万円	508百万円
販売用不動産評価損	12	12
完成工事補償引当金	116	126
賞与引当金	56	56
その他	137	188
繰延税金資産小計	845	892
将来減算一時差異等の合計に係る評価性引当額	△105	△120
評価性引当額小計	△105	△120
繰延税金資産合計	740	772
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	△228	△188
繰延税金負債合計	△228	△188
繰延税金資産(負債)の純額	512	583

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
法定実効税率	—	30.58%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	—	0.16
住民税均等割	—	0.87
評価性引当額の増加	—	0.37
その他	—	0.77
税効果会計適用後の法人税等の負担率	—	32.75

(注) 前事業年度は、法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間の差異が法定実効税率の100分の5以下であるため注記を省略しております。

(企業結合等関係)

該当事項はありません。

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

④【附属明細表】

【有価証券明細表】

【株式】

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表計上額 (百万円)
(投資有価証券)		
その他有価証券		
双日(株)	2,411,116	940
セイノーホールディングス(株)	183,895	271
首都圏新都市鉄道(株)	2,000	100
東洋建設(株)	200,000	85
関西国際空港土地保有(株)	1,580	79
中部国際空港(株)	506	25
富士ファシリティサービス(株)	40,000	24
トモニホールディングス(株)	47,765	20
(株)みどり会	10,000	5
不動産信用保証(株)	500	5
その他15銘柄	30,605	10
計	2,927,967	1,565

【債券】

銘柄	券面総額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)
(投資有価証券)		
その他有価証券		
第6回三菱UFJフィナンシャルグループ プ永久社債劣後免除特約	200	202
第328回利付国庫債券	23	23
第321回利付国庫債券	5	5
計	228	231

【有形固定資産等明細表】

(単位：百万円)

資産の種類	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高	当期末減価 償却累計額 又は償却累 計額	当期償却額	差引当期末 残高
有形固定資産							
建物	784	3	—	788	237	20	550
構築物	17	—	—	17	14	0	3
工具器具・備品	211	8	21	198	162	10	36
土地	813	—	—	813	—	—	813
リース資産	16	7	—	24	13	4	10
有形固定資産計	1,843	20	21	1,842	427	35	1,414
無形固定資産							
ソフトウェア	257	19	—	277	111	50	165
その他	24	—	3	21	—	—	21
無形固定資産計	281	19	3	298	111	50	186
長期前払費用	4	0	1	2	—	—	2

(注) 「当期末減価償却累計額又は償却累計額」欄には、減損損失累計額が含まれております。

【引当金明細表】

(単位：百万円)

区分	当期首残高	当期増加額	当期減少額 (目的使用)	当期減少額 (その他)	当期末残高
完成工事補償引当金	382	255	219	4	413
賞与引当金	186	186	186	—	186
環境対策引当金	4	—	3	0	—
工事損失引当金	—	15	—	—	15
貸倒引当金	—	7	—	—	7

(注) 完成工事補償引当金及び環境対策引当金の「当期減少額(その他)」は、必要額の減少による戻入額であります。

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

第6【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から翌年3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	3月31日
単元株式数	100株
単元未満株式の買取り・買増し	
取扱場所	(特別口座) 大阪市中央区伏見町三丁目6番3号 三菱UFJ信託銀行株式会社 大阪証券代行部
株主名簿管理人	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社
取次所	_____
買取・売渡手数料	株式の売買の委託に係る手数料相当額として別途定める金額
公告掲載方法	電子公告といたします。ただし、事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告をすることができない場合は、大阪市において発行する産経新聞に掲載して行います。 なお、電子公告は当社ウェブサイトに掲載しており、そのアドレスは次のとおりです。 https://www.daisue.co.jp/
株主に対する特典	該当事項はありません。

(注) 単元未満株式についての権利の制限

定款にて、単元未満株式について、次に掲げる権利以外の権利を行使することができない旨を定めております。

- (1) 会社法第189条第2項各号に掲げる権利
- (2) 取得請求権付株式の取得を請求する権利
- (3) 株主の有する株式数に応じて募集株式の割当及び募集新株予約権の割当を受ける権利
- (4) 株主の有する単元未満株式の数と併せて単元株式数となる数の株式を当会社に対し売り渡すことを請求する権利

第7【提出会社の参考情報】

1【提出会社の親会社等の情報】

当社は、親会社等はありません。

2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から本有価証券報告書提出日までの間において提出した、金融商品取引法第25条第1項各号に掲げる書類は、次のとおりであります。

1. 有価証券報告書及び その添付書類並びに 確認書	事業年度（第72期）	自 2017年4月1日 至 2018年3月31日	2018年6月27日 近畿財務局長に提出
2. 内部統制報告書及び その添付書類	事業年度（第72期）	自 2017年4月1日 至 2018年3月31日	2018年6月27日 近畿財務局長に提出
3. 臨時報告書	企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第4号 （主要株主の異動）に基づく臨時報告書		2018年5月9日 近畿財務局長に提出
	企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号 の2（株主総会における議決権行使の結果）に基づく臨時報告書		2018年7月2日 近畿財務局長に提出
4. 四半期報告書及び確認書	（第73期第1四半期）	自 2018年4月1日 至 2018年6月30日	2018年8月10日 近畿財務局長に提出
5. 四半期報告書及び確認書	（第73期第2四半期）	自 2018年7月1日 至 2018年9月30日	2018年11月8日 近畿財務局長に提出
6. 四半期報告書及び確認書	（第73期第3四半期）	自 2018年10月1日 至 2018年12月31日	2019年2月8日 近畿財務局長に提出

第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2019年6月25日

大末建設株式会社

取締役会 御中

太陽有限責任監査法人

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 森内茂之 印

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 土居一彦 印

<財務諸表監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている大末建設株式会社の2018年4月1日から2019年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、大末建設株式会社及び連結子会社の2019年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

<内部統制監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、大末建設株式会社の2019年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、大末建設株式会社が2019年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
- (注) 1. 上記は、監査報告書及び内部統制監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管しております。
2. X B R Lデータは監査の対象には含まれていません。

独立監査人の監査報告書

2019年 6月25日

大末建設株式会社

取締役会 御中

太陽有限責任監査法人

指定有限責任社員 公認会計士 森 内 茂 之 印
業務執行社員

指定有限責任社員 公認会計士 土 居 一 彦 印
業務執行社員

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている大末建設株式会社の2018年4月1日から2019年3月31日までの第73期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、大末建設株式会社の2019年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

(注) 1. 上記は、監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管しております。

2. XBR Lデータは監査の対象には含まれていません。

【表紙】

【提出書類】	確認書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の2第1項
【提出先】	近畿財務局長
【提出日】	2019年6月25日
【会社名】	大末建設株式会社
【英訳名】	DAISUE CONSTRUCTION CO., LTD.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 日高 光彰
【最高財務責任者の役職氏名】	該当事項はありません。
【本店の所在の場所】	大阪府中央区久太郎町二丁目5番28号
【縦覧に供する場所】	大末建設株式会社 東京本店 (東京都江東区新砂一丁目7番27号) 大末建設株式会社 名古屋支店 (名古屋市北区域見通三丁目5番地) 株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

(注) 第73期より日付の表示方法を和暦表示から西暦表示に変更しております。

1 【有価証券報告書の記載内容の適正性に関する事項】

当社代表取締役日高光彰は、当社の第73期（自2018年4月1日 至2019年3月31日）の有価証券報告書の記載内容が金融商品取引法令に基づき適正に記載されていることを確認しました。

2 【特記事項】

特記すべき事項はありません。